

空間をデザインする
KONGO
www.kongo-corp.co.jp



図書館



01

読書の新たな魅力を創出する
「共読ライブラリープロジェクト」への取り組み

帝京大学メディアライブラリーセンター



02

ワンストップで様々な学習支援を展開する
「滞在型」図書館

立教大学池袋図書館



03

知的刺激を受ける場としての図書館づくり

福岡大学中央図書館



04

「つながり」を作り、育む図書館

紫波町図書館



05

これからの図書館のかたち

くまもと森都心プラザ図書館

PASSION

VOL.35 October.2013

パッション 第35号 発行元: 金剛株式会社 平成25年10月発行



文化施設



06

東日本大震災で被災した民俗資料の
保存修復の取り組み

国立民族学博物館



07

岐阜県美術館のIPM(総合的有害生物管理)
導入について

岐阜県美術館



08

明治期の貴重かつ豊富な資料と、
IPMの日常管理

博物館明治村



09

やなせたかし先生の多彩な創作世界を伝える、
家族で楽しめる美術館

香美市立やなせたかし記念館



10

自分たちなりのIPMへ、はじめの一步

柳川古文書館



公文書館



11

新島夫妻と宮城県と公文書と
宮城県公文書館



12

全国初、県と市町村の共同公文書館
福岡共同公文書館



読書の新たな魅力を創出する 「共読ライブラリープロジェクト」への取り組み

帝京大学メディアライブラリーセンター

話し手

中嶋 康 (帝京大学メディアライブラリーセンター グループリーダー)

中満 恒子 (同上 チームリーダー・運営管理担当)

辺見 純子 (同上 チームリーダー・情報利用サービス/企画システム担当)

堀野 貞美 (同上 チームリーダー・情報メディアサービス担当)



中嶋さん 辺見さん 堀野さん 中満さん

聞き手 / 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)、原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)



指定図書コーナー

一はじめに、帝京大学メディアライブラリーセンターの概要と特長について伺います。

帝京大学メディアライブラリーセンター(以下、MELIC)は、2006年に新館としてオープン後7年目になります。MELICのある八王子キャンパスは人文・社会学科系を中心に6学部11学科と短大2学科で構成され、約18,000人の学生が在籍しています。蔵書数は68万冊、職員数は13名、2012年度の入館者数は約75万人です。

特長としては、①高い開架率、②ユニークな選書、③「指定図書制度」の採用、の3点があげられます。①開架率は実に98%を占めており、ほとんどすべての図書に学生がアクセスできるオープンな環境となっております。②選書で特長的なのは、選書規程を基に、学術書以外にマンガや文庫・新書、ライトノベルなどの資料を購入している点です。マンガは受賞作品を中心に選書していますが、その他に学生からのリクエストがあったものはほとんど購入しています。③「指定図書制度」は学習支援の観点からの取り組みで、授業で使用する図書や参考図書を教員別に配架しています。本だけではなく視聴覚資料も同様です。

その他、学習支援の新しい形として2012年度から4カ年計画で取り組んでいる「共読ライブラリー」プロジェクトが挙げられます。読書を通じた学習基礎力、自己考察力の向上を図る取り組みは学生をはじめ学内外から反響が寄せられています。



「緑陰文庫」開催時のBFメディアラウンジ【帝京大学メディアライブラリーセンター提供】

一「共読ライブラリー」プロジェクトの誕生秘話についてお聞かせください。

MELICでは「共読ライブラリー」以前にも学習支援として、先ほどの「指定図書制度」をはじめ「図書館ガイダンスの授業での必修化」や「POP展示を中心とした読書授業連携」、「ビブリオバトル」などを段階的に導入し、学生との接点を作ってきました。その他にも、学生が気軽に立ち寄れるようにパブリックスペースにおいて「緑陰文庫」を創造したり、「イルミネーション」を行ったりした結果、集う場としても定着しています。このように図書館に足を運んでもらうための工夫やアイデアを実践してきましたが、新館効果が弱まってきた2011年度に、貸出数が初めて減少に転じてしまいました。その頃、松岡正剛氏の松丸本舗^{※1}など、本に対する先進的でスタイリッシュな取り組みを知り、協力してプロジェクトを実施することになりました。松岡正剛氏が提唱する手法は、本を手にとって



イルミネーションを配したBFメディアラウンジ【帝京大学メディアライブラリーセンター提供】

もらう工夫や読書の楽しみなど面白い仕掛けが盛りだくさんで、偶然にもMELICが考えている事と重なったのです。松岡正剛氏が提唱する「本を薦めたり、運ねたり、読み合わせたり、評し合う」という「共読」の考え方をベースに、単に資料を並べるための本棚導入ではなく、本棚を使った「本」と「人」のコミュニケーションによって新たな読書の魅力を創り出し、読書推進へと繋げていく「共読ライブラリー」のコンセプトへ発展させていきました。

※1：松丸本舗…松岡正剛氏と丸善のコラボレーションで出来た書店。テーマに沿って本を並べる等、独自の取り組みを展開した。(2009年10月23日-2012年9月30日)

共読ライブラリーの具体的な取組みについて伺います。

まずは展示架を作ることからはじめました。書き込みが簡単で、ディスプレイ的にも有効な黒板を使った本棚を採用することにしました。黒板本棚を使ったコミュニケーションは、「本を読むことに真っ正面から取り組もう!」というメッセージを具現化する良いきっかけとなりました。共読を実践するにあたり、職員全員で編集工学研究所によるワー



クショップを受講し、実際に本棚を作り、書き込みやディスプレイする手法、アレンジを学びました。そうして作られた本棚群を「MONDO書架」と名付け、5つのテーマで資料を紹介し始めました。

- ①S-MONDO(Special)
ゲスト著名人が学生や教員の質問に本で答える問答棚
- ②C-MONDO(Career)
キャリアを切り開く棚
- ③L-MONDO(Life)
人生を豊かにする棚(編集工学研究所と図書館員が3ヶ月に1度の交代で行います)
- ④T-MONDO(Teikyo)
帝京大学を発信する棚
- ⑤New Books
図書館員が週代わりでオススメ本を紹介する棚

次に、読書術コースウェアの導入を開始しました。これは授業と連携し読書リテラシーの獲得を目指すものです。編集工学研究所の読書術レッスンを帝京大学の学生向けにアレンジし、3週間のオンライン読書術コースを実施しました。2012年度に教育学部1年生に試験的に導入し、70%の学生が最後の課題まで修了しました。現在は教育学部に加え、文学部史学科と短大1年生に対して行っています。

学生には共読サポーターという名称で、MONDO書架づくりに参画してもらっています。昨年の1期生は18名からスタートし、2期生も含めると40名程度になります。サポーターの学生にとっても自分が黒板に書いた言葉が人の読書のきっかけとなっている姿を見るのは素直に嬉しいことで、次の取り組みへの糧に



MONDO書架(New Books)



MONDO書架背面(New Books)



MONDO書架(C-MONDO)



黒板仕様の側板

もなっているようです。MONDO書架の貸出率は70%強です。New Booksの棚などは1週間に1度模様替えして、返却された資料は再配架されません。本棚に並んだ本との一瞬一瞬の出会いが付加価値となって学生の関心を集めているようです。10年間も借りられなかった本がMONDO書架に配架した途端に借りられていくこともあります。

ワークショップの感想としてどうでしたか?

これまでは分類番号順で資料を並べていただけでしたが、ワークショップでは、①一定のテーマで選ぶ(例えば表装が赤い本のみを選書して書棚を「赤の棚」と名付ける)、②魅せるディスプレイを意識する、③本の内容をコメントする、④情報をどのように編集し、ストーリーを作り上げていくかを考えるというように、これまでの業務と全く違った角度での本や資料との接し方を学びました。ワークショップを経て、1人1人の職員が1冊の本の並べ方について色々考えるようになりました。例えばイラスト描きやコメントの付け方などといった思いがけない職員それぞれの才能を発掘することもできました。本棚は模様替えの都度バージョンアップしていることが目にみえて分かります。

このようなプロジェクトを実施するにあたり、学内調整はどうだったのでしょうか?

共読ライブラリープロジェクトは、図書館だけではなく、大学のブランドアイテムとして位置づけることも目指しました。つまりブランディングです。学長をはじめ多くの大学関係者が携わり、支持を得てきました。

共読ライブラリーのブランディングの根底には本学の教育理念である「自分流」があります。「自分流」とは「生き方の哲学そのもので、自分がなすべきこと、興味あることを見つけ出し、自分の生まれ持った個性を最大限に生かすべく知識や技術を習得し、それを自分の力として行動する」ということです。共読を通じて培われる力=読書リテラシーはまさに「自分流」を支えてくれることになります。このブランディングを学内外に積極的に情報発信することで、認知をいただけたことは幸いでした。

全学で推進していくための具体的な行動としては、5つ挙げられます。①学生が主体的に共読ライブラリーを運営していける組織体を作ること、②教員に推進側のメンバーとして参画してもらうこと、③学長をリーダーとした全学的プロジェクトのイメージ作りをおこなうこと、④外部の評価を大学内に還元すること、⑤すべてを記録し編集することです。ちなみに、これまで松岡正剛氏と沖永佳史学長の共読対談は2回実施、昨年の図書館総合展ではフォーラム主催やブース出展を行うことで、外部から多くの声をいただきました。今年も図書館総合展に出展します。

一課題について伺います。

共読ライブラリープロジェクトはまだ始まったばかりです。「読書術コースウェア」の学習基礎力向上(本の読み方

からスタートする)の段階から図書館は携わっていますが、まだ全学部まで至っておりません。教員との連携はさらに強化していかなければならないと考えています。

本プロジェクトは4力年計画として大学事業計画に折込まれています。当然それに見合った成果を出していく必要があります。その大変さも痛感しています。

一最後に、展望について伺います。

黒板本棚で人が感じている思いや薦め(リコメンド)を見える形にできました。共読に取り組んで今年で2年目になりますが、今後はリコメンドをシステム上で共有していきたいと考えています。SNS等の導入と情報発信の仕掛けを作り、バーチャルな共読環境が構築できればと思います。それには学生や教員だけではなく、一般利用者までも含んだリレーションを増やし、学内外のイベントと連動した形でできたら面白いと考えています。

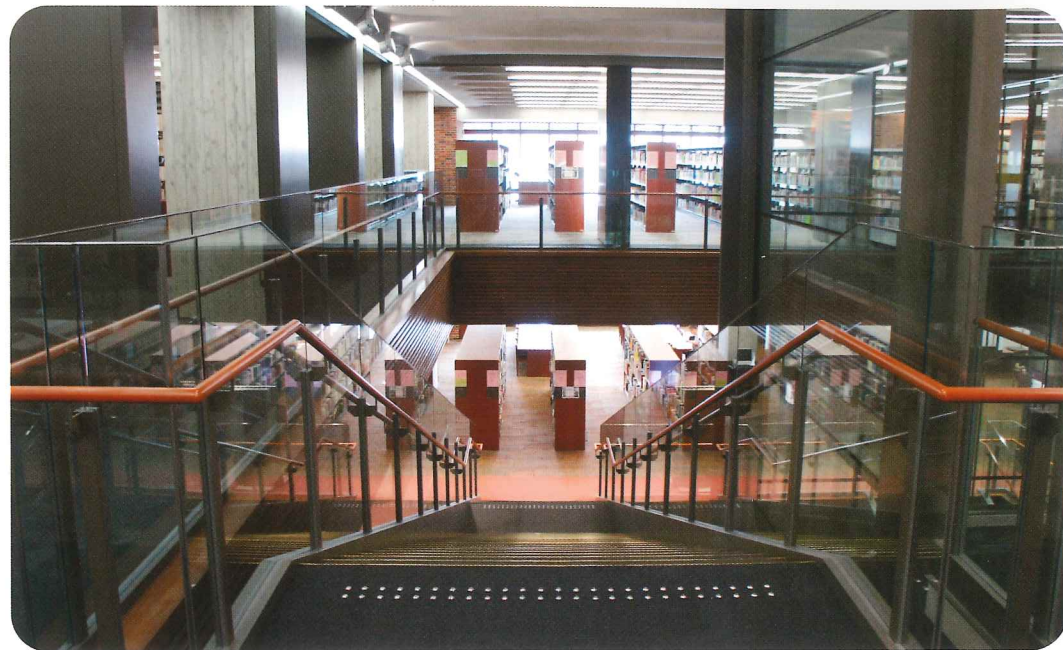
さらに、「MELICブッククラブ」へ発展させていきたいですね。今後の共読サポーターの増員と育成はその推進者としての一端を担ってくれることになるでしょう。

4年間のプログラムなので、今後も温かく見守ってください。

一本日は、貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

帝京大学メディアライブラリーセンター

所在地/東京都八王子市大塚359
開館時間/平日 8:45~22:00、土曜 8:45~18:30
休館日/日曜日・祝祭日・年末年始・臨時休館日
URL/https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/tos.html



ワンストップで 様々な学習支援を展開する 「滞在型」図書館

立教大学池袋図書館



話し手 小畑 守 (立教大学図書館利用支援課 課長)

聞き手 / 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)



—立教大学池袋図書館の概要について お尋ねします。

立教大学池袋図書館は、池袋キャンパス内に分散していた4つの図書館を1つに統合・整理することを前提に建設され、2012年11月に全面開館しました。旧4館の合計最大収蔵冊数が100万冊であったのに対し、池袋図書館は最大収蔵冊数開架100万冊(固定書架60万冊、電動集密書架40万冊)、閉架100万冊(自動書庫)の計200万冊としました。また、以前の図書館では座席数が約1,100席でしたが、池袋図書館は1,520席(講習会室100席除く)と増席しました。

—貴館の特長を教えてください。

延床面積が約19,000㎡、最大フロアのB1Fは100m×50mの大空間を持つこと、そして最大収蔵冊数200万冊と単館としては最大級の図書館の1つであることが特長と言えます。また池袋図書館は、4つのコンセプトを掲げています。

①「滞在型図書館」

長時間滞在ができる図書館をめざし、平日の開館時間を8:45~22:30と長く設けました。飲料は蓋付きであれば持ち込み可能にしています。B1Fリフレッシュルームにはパンの自動販売機もあり、3Fのテラスと合わせてこの2か所に限っては弁当などの軽食の持ち込みも許可しています。

就職活動中の学生は企業から電話がかかってくる事が多く、そのたびに慌てて図書館の外へ出て行く姿も見受け

られたため、池袋図書館では携帯電話通話可能なエリアを設けました。また、モバイル機器の進化に伴い、これらも学習のための情報収集に必要なツールであると考え、館内でのモバイル機器の充電も許可しています。

以上のように、学生が長時間滞在しても不便がないよう、できるだけ規制を緩和・撤廃しました。結果として、入館者の15%の滞在時間が3時間を超えるという統計データも取れています。学生にインタビューしてみたところ、「授業以外はここにいる」という声も多くありました。

②「グループワークの図書館」

利用者の動向を見ると、大学図書館は読書する空間というよりも、資料を用いた学習が行われる空間として使われることが多いと言えます。近年、アクティブラーニング、PBL(Problem Based Learning=課題解決型授業)といった、教員から提示された課題に対して学生が少人数のグループ毎に取り組むという授業が増えているため、図書館も学生の学びのスタイルの変化に対応することが必要となってきています。そのため当館にはグループ学習室を8室設けているほか、インタラクティブな学びの場として「ラーニング・スクウェア」を図書館

エントランス奥に設置しました。グループ学習室は予約制で、開館時間の70%ほど稼働しています。「ラーニング・スクウェア」は予約不要で自由に使えるスペースですが、夜遅くまで多くの学生で賑わっています。グループワークで賑わう場なので、ここでは携帯電話の使用を認めています。

③「バリアフリーの図書館」

主要な動線はすべて自動ドア化・フラット化し、車椅子の利用者が自由に移動できるようにしました。また、多目的トイレや電動昇降機も全フロアに設置しています。

④「学修支援の図書館」

図書館は学生の情報リテラシーの向上をミッションのひとつとして掲げており、その支援のためのサービスを提供しています。具体的には、図書館職員によるレファレンス、大学院生によるライティングヘルプである「ラーニングアドバイザー制度」、そして学部学生による「コンピュータヘルプ」の3つを柱としたものです。さらにICT環境の整備という意味で、図書館には600台のパソコンを用意しており、そのうち300台は「ラーニング・スクウェア」2階のPC貸し出しカ



ラーニング・スクウェア

02 ワンストップで様々な学習支援を展開する「滞在型」図書館 立教大学池袋図書館

ウンターでノート型PCを貸し出しています。これらのサービスの窓口がすべて2階に集中しているため、学生はワンストップでサービスを受けることが可能です。

また、学部授業の1コマを図書館職員が担当し、データベースの使い方の講習会も行っています。昨年度の開講回数は年間100回、延べ3,000人ほどの学生が受講しました。なお、館内は無線LANが使用できる環境です。また、携帯電話波の入りにくい地下階には、携帯電話各社に依頼し、3G回線を利用できるよう整備を進めています。

一図書館建設に至る経緯について教えてください。

冒頭で述べましたが、以前は池袋キャンパス内に図書館本館と学問分野別の研究図書館3館の計4つの図書館がありました。2004年に図書館が実施したア

ンケート調査で、学生はそのうち少なくとも2つの図書館を併用しているという結果が出ました。さらに「開架書架を増やしてほしい」「関連する図書資料が分散していて不便」といった声も多くありました。

その後の2006年、新図書館の整備計画が打ち出され、それまでキャンパス内に分散していた図書を統合・整理する方針が示されました。また、図書館は主要な教室棟と隣接した立地とし、図書館棟の上層フロアも研究室で構成するなど、図書館への学習・研究上の導線の向上も意識されました。

そして2008年10月から建設計画がスタートし、設計選定に3ヶ月、基本設計に11ヶ月、実施設計に6ヶ月、施工会社選定に4ヶ月、工事期間に23ヶ月をかけて、2012年11月の全面開館に至りました。その間の2008年11月から2012年7月にかけて、新図書館の検討委員会として「中央図書館分科会」が計141回開催さ

れました。これは図書館・施設課・企画課の職員からなる委員会で、新図書館建設に関するすべてのことをこの会で決定していました。この分科会では新図書館の機能上のレイアウトから、書架に用いる化粧ボルトひとつに至るまですべてのことに図書館職員が関わることができました。

開館してから1年を迎えますが、これまで図書館の設備に関する大きな不具合は見当たりません。分科会において施設課を中心として、時には設計会社、工事業者と綿密に打ち合わせができたため、各社の担当者の方々も私たちの意を汲んで下さり、かつ非常に真剣に取り組んで下さったので、その過程があつての成果と思います。

一新しい図書館づくりにおいて考えたことや配慮したことはありますか。

実は、新しい図書館の利用者サービス



は以前のもとの基本的には変わっていません。新しい図書館づくりにおいては、それらのサービスを一元的に利用しやすい“場”として整えることを考慮したと言えます。その結果、前述のグループワークのエリアの創設や600台に及ぶPCの整備にも繋がっていったのだと考えています。

一開館してみて、何か気づきはありましたか。

2013年4月～6月の入館者は、池袋キャンパスに4館あった前年と比べ約1.8倍になりました。平日は1日6,000人～

7,000人、試験期間は1日10,000人以上の利用があります。

池袋図書館では入館・退館ともに利用証による認証を行う形態としたので、入館者の利用状況が明確にわかるようになりました。入館者の滞在時間は3時間未満滞滞在者が85%ですが、3時間以上の滞在者が15%という数字も出ています。前年までの滞在時間に関するデータは取れないので正確な比較はできませんが、職員から見た実感として、新館における学生の滞在時間は以前より長くなっているように思います。

一それでは最後に、図書館としての今後の展望や課題について伺います。

これからは更に深く図書館を利用してもらい、学習支援に関わるサービスをフルに活用してもらえようしていきたいですね。そのためには、学部の授業などを含めた教育と図書館の連携が更に必要になるのではないかと考えています。

一本日はありがとうございました。



立教大学池袋図書館

所在地 / 東京都豊島区西池袋3丁目34-1
開館時間 / 月～金曜8:45～22:30、土曜8:45～20:00、
日曜・祝日10:00～17:00
URL / <http://www.rikkyo.ac.jp/research/library/central/>



閲覧室

知的刺激を受ける場としての 図書館づくり

福岡大学中央図書館



話し手 末松 久美 (福岡大学中央図書館 学術情報課)
本村 悠介 (福岡大学中央図書館 学術情報課)

聞き手 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)



インフォメーションコーナー



総合カウンター

「本日は、福岡大学中央図書館を訪問し、新しい図書館づくりに関するお話を伺います。はじめに、館の概要についてお尋ねします。

はじめに、福岡大学は9学部31学科、大学院に10の研究科を有する総合大学で、ワン・キャンパスで約2万人の学生が学んでいます。福岡大学図書館は中央館を本館とし、医学部分館と4つの分室(理学部・工学部・薬学部・スポーツ科学部)、筑紫病院図書室にて組織され、それぞれの専門分野に特化した資料を所蔵しています。

さて中央館は2012年7月に新築・開館しました。地上7階・地下2階の大きな施設になり、5階まで図書館、6階・7階は大学院の研究室で構成されています。収蔵規模としては開架50万冊、閉架140万冊の合計約190万冊、座席数は1934席を誇る、全国的にみても規模の大きな施設となりました。ちなみに、分館等を含めると学内の所蔵規模は約240万冊になります。

「今回の新しい図書館での特長について教えてください。

まずは国内でも最大級の収納量を有する自動書庫を導入しています。約140万冊の収納能力ですが、増設すれば約160万冊の規模になります。閉架書庫の自動化によって、旧来に比べて閉架の出納サービスが驚くほど迅速になりました。次に、各階にグループ学習室やラーニング・commonsを設けました。グループ学習室については図書館ウェブサイトから予約できますが、予約がなく空いている部屋は自由に利用できるようにしています。そのため多くの学生や院生が利用してくれています。

これまでは入退館システムが未導入だったので、ICカードとなっている学生

証に対応した入退館システムを導入しました。おかげで現在、平日1日当たり約2000人、試験期1日当たり約8000人の入館者管理が可能になり、学生の利用率も旧来に比べて大きく増加しています。

中央館と分館と4つの分室はワン・キャンパスにありますので、図書資料の相互の取り寄せが迅速です。ちなみにキャンパス内の配送巡回は電気自動車「愛称：ポポカ」を活用していますが、黄色い車体はキャンパス内で目立ちますし、小さな車体が可愛らしいので、学生には人気者です。図書館のキャラクター的存在になっています(笑)。



電気自動車「ポポカ」

他方で福岡大学は地域開放を推進し、一般の方の利用も可能です。学外の方からも専門的な図書資料のリクエストがあり、自動書庫から出庫した資料などを閲覧されています。

「開館までの道のりをお伺いします。

福岡大学創立75周年の記念事業の一つとして、中央館の新築プロジェクトが

掲げられました。旧館の建屋や設備の老朽化及び狭隘化、福岡西方沖地震における被災、ICT環境への対応といった多くの課題もあり、新館建設では課題への対処だけでなく、先進的な図書館運営・サービスを取り入れることになりました。

2008年から当館と規模が類似した全国の大学図書館を約12館視察して来ました。特に、自動書庫を導入している館を選定し、運用についての疑問などをヒアリングしました。2009年2月に図書館内にプロジェクトチームを発足させてからは、図書館内をはじめ、学内関係者、設計者と対話を重ね、多くの課題・検討事項を1つずつクリアしていきました。

「検討事項とはどういったものでしたか。

大前提として、「長期滞在型」の図書館を掲げ、そのあるべき姿について、幾多の協議を重ねていきました。

まずは諸室やゾーニングの配置検討です。施設建屋の計画は粗方決まっていたのですが、具体的に詰めていきました。閲覧室、情報サービス室、グループ学習室、ラーニング・commons、AVコーナー、リフレッシュコーナーとの運動性や区画性などを詰めていきました。

次に、書架や机、椅子、カウンター等の家具の検討です。できるだけ統一した形でデザインを決めていきましたが、難儀



ラーニングcommons

しました。設計者はデザイン性を重視し、図書館員は利用者の使い勝手や今後約30年使うための耐久性も考慮するという考え方の違いがあったので、幾度もモックアップを評価して、ギャップを埋めていきました。今回、ブックトラックも造作で対応してもらい、キャストの動作や握り手の位置や作業性も検証しましたよ。椅子については、長時間座っても疲れないとか、椅子の引き出しやすさや動かしやすさ、荷物の落下防止などが、かなりこだわったところ。椅子が一番使いますし、一番劣化しやすいところなので、気を使いました。

中央館は開架エリアの天井に照明がついていません。設計者側から、落ち着いて学習できる空間演出や省エネルギー対策として、間接照明と机の手元照明

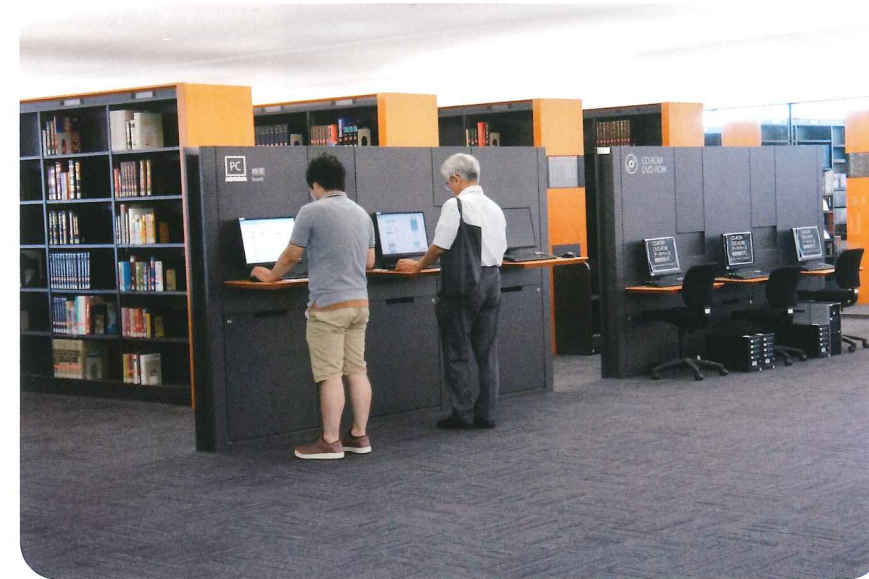
のみ設置という提案を受けました。計画時点では「やっぱり暗いのではないか」、「防犯上は大丈夫なのか」といった不安も正直ありました。実際は空間の演出や利用者からの苦情もなく、照明学会の照明普及賞もいただいたので、時代の流れに合った照明なのかもしれないと思っています。

さて、運営サービスについてですが、建物は最高のものが整いましたので、それに合うサービスの展開を模索することになります。学生に対する学修支援のひとつとして、ライブラリーアシスタントを配置しました。ライブラリーアシスタントは大学院生が構成員となっており、データベースの使い方やレポート・論文の書き方などを学部生にラーニング・コモンズにおいてアドバイスするシス

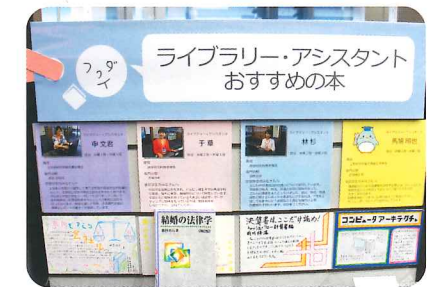
テムです。日中の時間帯にライブラリーアシスタントが常駐できるようにしているのが、学部学生からの相談件数も増え、評価も高くいただいています。

また、旧図書館では開架エリアに約10万冊程度しか配架できていませんでしたが、新館では30万冊が並びますので、学生や教員が多くの図書資料をブラウジングできるようになりました。さらに、豊富な電子ジャーナルやデータベースを利用できる環境も整えました。

自動書庫の導入の結果、利用者自身でOPACから特定資料を検索、出庫指示できるようになり、迅速な出納サービスが実現しました。自動書庫の利用も1日100件程度ありますので、これを人的に対応していたら多くの時間を要していたと感じています。



OPAC検索PC



親しみやすい図書館を目指して

「開館後の気づきや課題がありましたら、お話しください。」

これまでお話しした各種コーナーやICT環境について、学生たちには特に説明しなくてもどんどん使われており、適応力の高さに気づかされました。特に、9つあるグループ学習室は常時利用されている状態で、ゼミ単位や資格取得のための勉強会、プレゼンの練習や教職課程の模擬授業といったあらゆる用途に活用されています。ここまで活用してくれているということは、潜在的ニーズに対応できたということではと考え、嬉しく感じています。ちなみに、図書館利用説明会については、ゼミ単位での申し込み制で実施しています。今年度の1年生を対象にした利用説明会の受講率は、2013年前期:43.7%(学生数4752名中2075名受講、学生数は平成25年6月1日時点)でした。

さて、課題としてはハードとソフトが

備えたこれほどの図書館を、もっと活用してもらおうこと、そのための学生との接点づくりです。ひいてはスタッフへ質問しやすい、相談しやすい、親しみやすい雰囲気づくりが必要だと考えています。例えばライブラリーアシスタントだけでなく、職員みんなで学生への声掛けを行い、細かな対応を積み重ねています。さらに読書会や選書ツアーなど、図書館に親しみやすさを感じてもらえるようなイベントを開催しています。ちなみに、中央館ではツイッターで情報発信もしています。今後はSNSをより活用しながら、学生との距離を近づけていきたいところですね(笑)。

「最後に、展望について話を伺います。」

図書館は単に本を読むところだけではなく、勉強するだけでもありません。学生同士や職員、ライブラリーアシスタ

ントとディスカッションしたり、普段接することがない外部の人たちの話を聞いたりすることによって、思考の幅を広げ、想像力を養う場だと思います。また当館は冊子の資料だけではなく、豊富な電子ジャーナルやデータベースも取り揃えています。それらを含む情報の活用や学生のリテラシー能力向上を推し進めていくためにも、今後も積極的に様々な接点づくりができればと考えます。私たちも創意工夫し、チャレンジしていきたいと思っています。

「本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。」



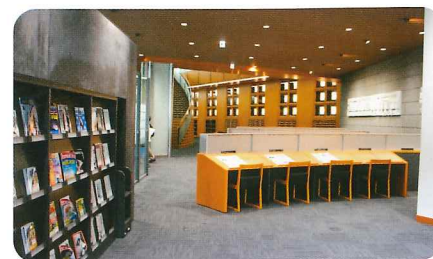
窓際の閲覧席



試行錯誤を重ねた椅子



グループ学習室と予約状況が表示されるディスプレイ



ブラウジングコーナーと新聞閲覧コーナー

福岡大学中央図書館

所在地 / 福岡市城南区七隈八丁目19-1
開館時間 / 月曜~土曜 8:50~22:00、日曜8:50~17:00
休館日 / ウェブサイトにて確認ください
URL / <http://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/>



館内



入口近くの児童書コーナー



地域資料



農業支援コーナー

図書館 04 Interview

「つながり」を作り、育む図書館

紫波町図書館



話し手 **工藤 巧** (紫波町図書館 館長)
手塚 美希 (紫波町図書館 主任司書)

聞き手/木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)

一はじめに、紫波町図書館の概要と特長についてお尋ねします。

紫波町図書館は、官民複合施設「オガールプラザ」の情報交流館内にあります。このオガールプラザは、行政と民間がパートナーを組んで事業を行う官民連携事業(PPP:Public Private Partnership)「オガールプロジェクト」の一環で建設されました。

オガールプロジェクトは、もともとは紫波中央駅前の都市開発を主な目的として計画された事業です。行政の財政負

担が軽く、且つ地域の方のためになるPPPの形態を取って都市開発に取り組むことになりました。官民のヒアリングを丁寧に重ね、建設する施設の内容を詰めていく中で、かねてより町民の方から多く挙がっていたけれども財政的に実現が困難だった「市民で図書館を作りたい」という声もまた取り入れられ、このオガールプロジェクトの中核施設であるオガールプラザ(情報交流館と民間テナントの複合施設)の情報交流館内に紫波町図書館が建設されることになりました。オガールプラザの竣工は2012年

6月、図書館の開館は同年8月末でした。

現在当館には開架4万冊、閉架3万冊の蔵書数があります。運営は町の直営で、一部の業務は地域のNPOに委託しています。紫波町職員から館長1名、事務局長1名、司書4名、そして業務委託しているNPOから司書5名の計11名の職員で運営しています。

一次に、図書館ができるまでの経緯をお聞きます。

まず紫波町教育委員会と、図書館をつ

くろう委員会が連携してヒアリングを重ね、「図書館基本構想・基本計画」が策定されました。その時点でオガールプラザ全体の建物は形になっていましたが、図書館にあたる施設の内部設計はまっさらな状態でした。次に、その「図書館基本構想・基本計画」をもとにしながら、紫波町公民連携室と設計事務所、外部アドバイザー^{※1}、オガールプロジェクトのSPC(specific purpose company: 特別目的会社)であるオガール紫波(株)にて打合せを重ね、より具体的な計画へ落とし込んでいきました。打合せは週に1回以上は行いましたし、他館の見学にも行きましたね。

最初に策定された「図書館基本構想・基本計画」において、7つのミッションが策定されていたので、それらを運営方針へ落とし込み、3つのスローガンと3つの運営の柱にまとめました。【図参照】そしてそれをもとに、ゾーニングや選書を進めていきました。

一図書館づくりの中で配慮した点がありますか。

まずは、上記のスローガンと運営方針に沿うことです。例えば3つの運営の柱①の「子どもたち(0歳から高校生まで)と本をつなぐ」に沿って、0歳の赤ちゃん

んを連れてお母さんでも気兼ねなく入館できる図書館にするために、館の入口から奥へ向かうにつれて静かになるようなゾーニングを考えました。具体的には、入口近くに児童書架や「あかちゃんへのや」、その奥にティーンズ向け書籍のコーナー、さらにその奥に一般図書を…といった具合のゾーニングです。3つの運営の柱②の地域資料については、取

集前に実際に私自身も紫波町の風土・環境を見て回りました。そこで感じたのですが、紫波町は歴史がある町なのに意外と知られていないのです。それをもっと知ってもらうために、資料の収集方針にも反映させて地域資料を可能な限り多く集めるようにしました。3つの運営の柱③の産業支援に関しては、館内に特設コーナーを設けています。とくに紫波町

※1 外部アドバイザー:秋田県立図書館副館長 山崎 博樹氏、(株)アジュール代表 佐藤 直樹氏

「紫波町図書館基本構想・基本計画」における7つのミッション

- ①「たくさん情報に出合える場」であること
- ②「次代を担う人づくりの場」であること
- ③「まちの歴史・風土・文化に出合える場」であること
- ④「活力あるまちづくりを支援する場」であること
- ⑤「協働の推進に寄与する場」であること
- ⑥「人に出会える場」であること
- ⑦「新しい自分を発見できる場」であること

◆3つの基本スローガン

- ①「知りたい」を応援する図書館
- ②「学びたい」を応援する図書館
- ③「遊びたい」を応援する図書館

◆3つの運営の柱

- ①子どもたちと(0才から高校生まで)本をつなぐ
- ②紫波町に関する地域資料を収集・保存する
- ③紫波町の産業支援

で盛んな農業に関する資料を一箇所に集めて置いています。

また、地震対策も配慮した点です。ちょうど図書館の計画段階で東日本大震災が起きたこともあって、地震への対策を強く意識して書架を採用することにしました。

そして、利用者の方々に対して図書館の敷居を下げ、この図書館で出会った人と人、人と情報の間に生まれる「つながり」や「コミュニケーション」を大事にすることも配慮しました。これまで紫波町には教育委員会施設内の図書室(蔵書6万冊)しかなかったため、地域の方々にとって「図書館」というものに関する印象や先入観がほとんどゼロの状態でした。だからこそ、「図書館＝誰でも入れることができる」という印象からスタートさせるチャンスでした。そのため「にぎわいのある図書館」というものを意識して、館内には飲食可能なスペースを作ったり、BGMを流したりと、できるだけ「誰でも入りやすい」と感じてもらえる雰囲気作りに努めました。開館後の利用者の方の反応としては、「カフェみたい」という意見を

頂いたり、オーディオの不具合でBGMが止まった時には「音楽がないと逆に落ち着かない」というお声を頂いたりしましたので、雰囲気作りが効を奏しているのではと思います。いつかはレファレンスカウンターでもコーヒーを出しながら利用者の方の相談に乗る…というのが夢です(笑)。

また、人と情報、人と人との「つながり」の場にするという意味では、館内で月に1度行うイベントや企画展示も重要な手段である意識しており、図書館単独ではなく他の団体・組織等と連携・コラボレーションした催しにしています。今は「わたしの1冊」という、紫波町内在住のものづくり職人の方が推薦する本と制作された作品を展示する企画を行っています。推薦された本だけでなく、推薦者が携わっている地域の伝統技術・産業も紹介することで、地域との「つながり」を創出する狙いがあります。こういった企画の準備の際には、職員自ら出かけて行って相手のお話を直接伺ったりもします。料金制のイベントと連携を行い、集まった料金の一部を図書購入費としていた

だいたこともあります。このような様々な企画を通じて、人と情報、人と人をつなげていきたいと考えています。そして当館に来て下さった方が、さらに多くの人へとその「つながり」を展開して下さいと願っています。

その他、オガールプラザ全体の「デザインガイドライン」もありますので、当館も運営をしていく中で色々な配慮をしています。館内のサインを少なくし、ポスターも貼りすぎないようにしており、そのかわりに図書館の利用に関して分かりにくそうにしている利用者の方がいれば職員が進んで声かけしてご案内する方針にしています。声かけに関連して言えば、来館者の皆様へ職員からすすんで挨拶をするという点も意識しています。これらもまた、図書館の敷居を低くすることにも繋がっているかと思えます。

また、交流館に音楽スタジオがありますので、楽譜の収集・貸し出しなども行っていますよ。



企画展示「わたしの1冊」

一課題について伺います。

構想・計画段階での一番の課題は、これまで得た知識や経験が役に立たなかった点でした。図書館をゼロから建てるプロセスは全く知りませんでしたので…そのため、色々な方へのヒアリングを積み重ねたり、見学・視察を通じて図書館のイメージを膨らませたりしながら、具体的な形を作り上げてきました。

また、運営面において、まだまだ日常業務の定着が完全ではないという点が課題だと思います。企画やイベントにもっと力を入れたいのですが、そこまで至っていないというのが現状です。企画専門の部門がほしいくらいですが、人手も足りません。この点については交流館や外部団体・組織との連携を図ってきたいと思っています。

一今後の展望について教えてください。

やはりPPPによって設立されたという背景もあって、これから人を集めて「にぎわい」を創出し続けながら、財政予算・コストパフォーマンスも同時に考えなければなりません。「志」と「算盤」のバ



地元作家の作品を紹介



楽譜コーナー

ランスを取りながら進めていくことが重要だと思います。

そして人を集めることで、色々な交流の場をつくり、この図書館から他の何かに繋がる場にしたいと考えています。実際に今、来館者の20%以上は町外からいらっしゃる方だというデータもあります。これからも「外へつながる図書館」でありたいですね。

さらには街づくりや、盛岡のベッドタウンである紫波町ならではの居住環境から一歩進めて「都市と農村を楽しむ」という新しいライフスタイルの創造にも貢献できればと思っています。統計でも、最も利用が多いのは30代・40代という結果が出ていますので、地域の方のライフスタイルに定着しつつある手ごたえは感じています。

そして、ここで過ごした時間・会っ

た人々、経験したイベントが、利用者の皆さんの人生に深く関わり、「ここに紫波町図書館があってよかった」と思ってもらえるような図書館にしていきたいです。

一本日は貴重なお時間を頂き、ありがとうございました。

紫波町図書館

所在地 / 岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前2丁目3-3
オガールプラザ中央棟 情報交流館内
開館時間 / 火～金 10:00～19:00
土・日・祝日 10:00～18:00
休館日 / 毎週月曜日(祝日にあたる場合は翌日)、
館内整理日(月末さいごの平日)、
特別整理期間(年7日以内)、
年末年始(12月29日～翌年の1月3日)
URL / <http://lib.town.shiwa.iwate.jp/>



飲食可能な「読書テラス」



飲物を飲みながら本を読む閲覧スペース



プラザ図書館3Fカウンター

図書館

05

Report

これからの図書館のかたち

くまもと森都心プラザ図書館

田中 榮博(くまもと森都心プラザ図書館 館長)

1. はじめに

日本人の代名詞として、「誠実さと時間に正確」という言葉が挙げられます。しかし、明治まで時代を遡ると、諸外国からの評価は、日本人は時間にだらしないということが定評でした。当時の政府は、時間のことを認識させることを目的として、時の博覧会というイベントを行い、これが現在の「時の記念日」に変化してきました。

時が流れて、2020年東京オリンピッ

ク招致でのキーワードとなったのが、「おもてなし」という言葉でした。日本の「おもてなし」にいち早く注目したのが、ディズニーであるとも言われています。

さて、図書館と接遇。接遇という言葉は、図書館を運営している立場、利用している立場で、どのように感じているでしょうか。お客様が100人いれば、100通りの接遇があると言われるように、理解しているようで、実状が伴わない、言い換えればつかみどころがないのが接遇ではないでしょうか。2011年開館したく

まもと森都心(しんとしん)プラザ図書館が取り組んできた接遇と図書館運営への取り組みについて、ご紹介いたします。



くまもと森都心プラザ全景

2. プラザ図書館の概要

開館日 2011年10月1日
 開館時間 月~土 9:30~20:00
 日、祝日 9:30~18:00
 蔵書数 約15万冊('13.3.31現在)
 休館日 毎月第3水曜日、年末・年始、
 蔵書点検期間(5日間程度)
 面積等 プラザ3階
 1,644㎡、閲覧席125席
 4階
 1,844㎡、閲覧席125席、
 学習室36席
 その他 ネット検索用、
 DB検索用PC 計16席、
 AV閲覧席10席

そして、特筆すべき事項として、図書館4階には、ビジネス支援センターが併設されています。センターには、中小企業診断士が定席し、お客様からの相談に応じています。また、創業支援室が7室あり、手厚い起業支援も行っていきます。

図書館とビジネス支援という点について、通常では図書館が相談を受けたものを、二次的にどの部署が担うのがポイントとなりますが、プラザ図書館では、ビジネス支援センターと連携しているため、常時問題解決が可能となっており、このような形のビジネス支援は、全国的にも非常に珍しく、今注目を浴びつつあります。

なにかがみつかる
 みんながつながる
 ここからはじまる。

くまもと森都心プラザのコンセプトです。

2階 観光・郷土情報センター
 3,4階 プラザ図書館
 4階 ビジネス支援センター
 託児室
 5階 プラザホール
 6階 会議室
 これらの組織を、「情報」というキーワードで繋がっているのが、くまもと森都心プラザです。

3. プラザ図書館の方針

①貸出・返却型から問題解決型へ
 プラザ図書館は、県内では初めての問題解決型の図書館です。館内の閲覧席のうち、約3分の2が調べもの可能な席となっています。

②利用者からお客様に
 プラザ図書館では、来館される方を、「利用者」ではなく、「お客様」と呼びしています。そして、目線は常にお客様目線で統一しており、書籍の排架においても分類順ではなく、お客様の動線を考え書架を配置しています。

③待受け型から回遊型に
 図書館スタッフは、カウンターに座っているだけではなく、フロアを回り、積極的にお客様と接点を持っています。

④図書館運用から図書館経営へ
 業務上の無駄をチェックし、業務効率向上を図っています。知識よりも知恵を出し合うことが、これからの図書館を動かしていく上で、必要です。

⑤きちんとした接遇
 来館いただいたお客様に対し、気持ち

よく図書館をご利用いただくため、接遇研修を定期的に行っています。また、正しい情報の伝達は接遇の基礎であることから、情報の伝達は確実に行うことを実践しています。

⑥地域社会との協働
 これからの図書館は、町づくりの中核を担う部署でなければならないと思います。町の賑わいを作るためには、地域に溶け込む必要があります。地域社会との一体感が必要条件であると考えます。

⑦高品質な読書空間の維持
 図書だけでは良い読書空間は作りだすことができません。良い読書空間を作りだすには、図書館を利用するお客様の協力も重要な要素です。図書館スタッフとお客様が協力して、高品質な読書空間を作り上げているのも、プラザ図書館の特徴です。

プラザ図書館は、図書館員のための図書館ではありません。図書館を利用する人のための図書館なのです。しかし、決してお客様の言い分を通すということではありません。お客様のご意見を十分に伺ったうえで、プラザ図書館の方針をしっかりと伝える。それがコミュニケーション力だと思っております。コミュニケーション力こそが、これからの図書館司書の必須条件だと思っております。

4. プラザ図書館の活動

プラザ図書館が行う企画は、おはなしかいなどの恒常的なもの、自主的に行うものを合わせて、年間150回以上に上ります。その中から、代表的なものを紹介いたします。

①おはなしかい

おはなしかいは、幼児対象のものと小学校低学年までを対象としたものを、それぞれ週一度行っており、毎回多くの人が集まり、最近では、参加する人たちの

中から、コミュニティが出来上がりつつあります。

②ビブリオバトル

ビブリオバトルやサイエンス・カフェは、プラザ図書館開館当初から積極的に行っています。今では、開催方法も市内図書館や大学との共同開催など、活動範囲も広がり始めました。

③市民グループとの協働活動

プラザ図書館では、「アートを図書館に」という事業を熊本に在住する芸術家の

皆さんと共に展開しています。これは、芸術家の皆さんに対して、作品発表の場を提供しつつ、作品に関する書籍を、来館されたお客様にご覧いただくというもので、絵画、写真、彫刻など芸術家の個性あふれる作品と本のコラボレーションが、館内で憩いのスペースを創出しています。

このように、図書館と地域社会の協働活動から、新しい形の図書館サービスが生まれました。



おはなしかい



ビブリオバトル風景



アートを図書館に

5. 図書館とビジネス支援

今、全国でも数多くの図書館が積極的にビジネス支援を展開していますが、図書館単独でのビジネス支援には限界があります。また、図書館とビジネス支援センターの設置場所の関係でも大きな影響が出るのではないのでしょうか。図書館で「調べたこと」、センターで「教えられたこと」の確認が容易にできるかどうか、ビジネス支援サービスの一番重要なことだと思うのです。

前述の通り、プラザのビジネス支援センターは、プラザ図書館4階に併設されており、「調べたこと・教えられたこと」が直ぐに確認できるという全国でも絶好のポジションであることから、近年、ビジネス支援センターが注目されつつあります。センターでは、年間約100回程度ビジネスセミナーを開催していますが、その中には、小中学生を対象とし

たジュニア・ビジネススクールも含まれています。ビジネス支援という言葉から、ともすれば、大人を想像しがちですが、プラザでは、将来を担っていく小中学生に対し、起業するということを、センターと図書館が協働で、「調べること・教えること」に取り組んでいます。

6. まとめ

くまもと森都心プラザは、開館1年後の平成24年11月には、来館数100万人を達成しました。そして、25年11月に200万人の来館数に達する予定であり、来館数の中で、7割近くを占めているのが図書館です。また、人口動態調査においても、熊本駅前では、25年度の調査での増加値は、前回調査時の1.5倍であったという結果となり、その要素は、新幹線の開業と、くまもと森都心プラザ効果であることが明らかになりました。

これらの数値が物語るように、これか

らの図書館は、従来からの図書館機能のみではなく、町の賑わい作り、地域の活性化、市民にとってのコミュニケーション作りの場となる必要があります。その中核になる人こそ、図書館司書でなければなりません。図書館だけの司書ではなく、町の顔、町の案内人としての司書である必要性が求められているのです。それこそが、新しい時代の図書館ではないでしょうか。新しい時代の図書館機能を担うためには、停滞した図書館ではなく、常に躍動する図書館作りを目指さなければなりません。くまもと森都心プラザ図書館は、これからも町の中核としての図書館作りを推進し、「くまもとブランド」の定着を大胆にそして着実に浸透させるため、プラザ図書館の接遇への取り組みは、動き出したばかりです。



ビジネス支援セミナーの風景



こどもまつり

くまもと森都心プラザ図書館

所在地 / 熊本市西区春日1丁目14-1
開館時間 / 月曜~土曜 9:30~20:00、
日曜・祝日 9:30~18:00
休館日 / 毎月第3水曜日、年末・年始、
蔵書点検期間(5日間程度)
URL / <http://stspiazza.jp/>

はじめに

2011年3月11日14:46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、未曾有の被害をもたらした東日本大震災となった。そして、この大震災では、有形文化財のひとつである民俗資料も多数被災した。ここでいう民俗資料とは、地域の文化のなかで育まれ、使用された生活用具や生業用具、祭祀用具といった資料群である。

これらの有形の文化財の保護のため、文化庁の呼びかけで、全国規模の支援体制として「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」が結成された。実際

の活動は、津波災害で被災した文化財の救出、一時保管、応急処置である。

ここでは、私が実際におこなった民俗資料の救援活動とその後におこなった保存修復について報告する。

有形文化財のレスキュー体制

東日本大震災で被災した有形の文化財のレスキューは、その被害の大きさから、全国規模で展開する必要があり、その体制の整備を文化財に関わる国立の研究機関を中心に文化庁が呼びかけた。

この呼びかけに対し、3月30日付けで「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」(以下、救援委員会とする)が立ち上げられ、東京文化財研究所を本部とする体制が整備された(図1)。救援委員会に参加した機関を下記に示す。

救援委員会の活動およびその対象は、設置要綱に定められており、それを要約すると、救援委員会の活動は、救出、一時保管、応急処置の3つの活動を支援するものである。そして、その対象は国・地方の指定等の有無にかかわらず、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴

史資料、有形民俗文化財等の動産文化財及び美術品であると示されている。ここでの国・地方の指定された文化財とは、日本国の文化財保護法や国内の市町村の文化財保護条例の規定のなかで、特に重要で保存の必要性があるものとして指定されている文化財のことを指している。実は、ここで対象とされた文化財の設定には大きな意味がある。通常、文化庁や自治体の教育委員会で保護の対象とされる文化財は、指定品に限られている。一方、救援委員会の対象文化財には、指定の有無を問われていない。つまり、文化庁も自治体の教育委員会も東日本大震災という大惨事に対して、通常の業務範囲を大きく拡大しているのである。なお、このような決断で組まれた体制は、1995年の阪神・淡路大震災以来である¹⁾。

有形文化財の救援活動

救援委員会における被災文化財の救援活動は、救出、一時保管、応急処置の3

つの活動を支援するものであることは前述したとおりである。このなかで、救出、一時保管の活動は被災現場のなかで実施するものであるため、かなり劣悪な環境下での作業となる。

救出活動では、周囲のがれきの撤去作業で巻き起こっている粉塵への対処、ヘドロなどの匂いや暑さと戦いながらの作業となる(写真1)。また、災害発生から日数がたち、さまざまなものの腐敗が始まると、破傷風の心配がでてきた。さらに電気も通っていない被災した博物館施設での活動は、真っ暗な場所での作業となり、床にがれきが散乱しているような不安定な足元と天井からの落下物に注意しなければならない。そのため、マスクはもちろん、ヘルメットや長そで・長ズボンの作業服、分厚い作業手袋や安全靴、ヘッドライトなどを装備する必要がある。このような環境のなか、床面に散らばっているガラスの破片や津波が運んできたヘドロを取り除きながら、埋も

れている文化財を探していく。装着しているゴーグルはすぐに汗で曇り、全身汗まみれとなりながらの作業は、体力を著しく消耗した。

一時保管の作業では、被災した博物館の担当者が立ち会える時間が限られたなかで、文化財を一気に保管場所へ移送することが求められた。というのも、被災地では文化財の救出活動の前に、生活全般の復旧・復興活動が求められるため、博物館担当者といえども、博物館のことだけに従事することは許されない状況だからである。可能な限りトラックの荷台に積載して移送するため、脆弱なものは別として、ある程度強度のあるものは、美術梱包をする暇はなかった。したがって、荷台には強度の強いものを下に、軽いものを上に積み込んでいくこととした。

応急処置の作業は、救出、一時保管の作業と比べると、やや落ち着いた環境での作業となる。今回の震災で被災した民俗資料の汚損原因は、主に津波によって

文化施設 06 Report

東日本大震災で被災した民俗資料の保存修復の取り組み

国立民族学博物館

日高 真吾 (文化資源研究センター 准教授)

図1 / 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救済事業(文化財レスキュー事業)

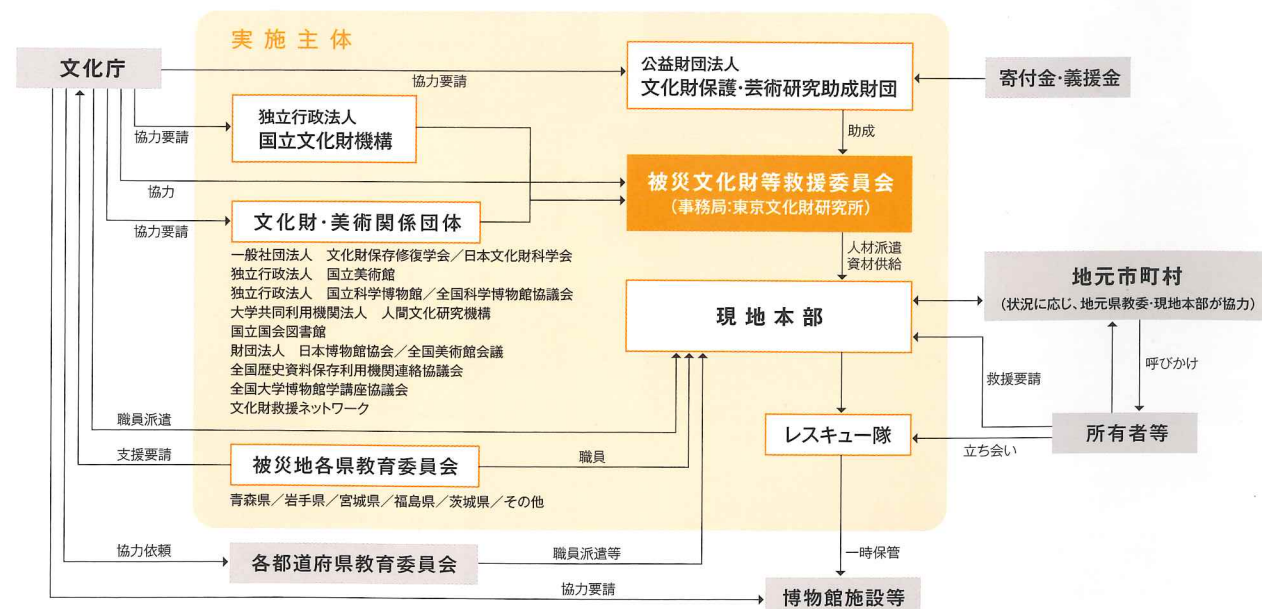


写真1 / 救出活動の様子



写真2/洗浄キット

運ばれた砂の付着であった。また、もう一つの劣化要因として津波に含まれていた塩分についても考慮する必要があった。そこで、応急処置では、表面に付着した砂と塩分の除去について検討した。

表面に付着した砂は、清浄環境にある一時保管場所を汚損する要因でもあり、必須の作業となる。また、この表面の砂は塩分も含んでいるので、湿気を呼び込み、カビの発生を促進させる。さらには、一時保管場所で進められる資料整理等の活動では、取り扱いを困難にし、整理作業そのものを著しく阻害する要因となるため、早急に除去する必要がある。

もうひとつの大きな劣化要因である塩分に対しては、今回の震災で被災した文化財の塩分の除去を目的とした脱塩処理の実施が考えられた。しかし、水槽や排水施設の整備が必要なことから、2011年度での実施は難しい環境にあると判断した。

以上のことから、応急処置をおこなう現場で脱塩処理を実施することは難しいと判断し、2段階方式による応急処置法を採用することとした。

第1段階は、資料の表面を汚損し、取り

扱いそのものを困難にしている砂およびヘドロを除去することである。この除去法については、当初は、筆者がこれまで経験してきた河川の洪水による被災民俗資料の洗浄と同様、一度、水に浸漬して、表面の砂やヘドロをふやかし、柔らかい刷毛やブラシ

を用いて除去することを想定しており、そのための条件は水が使えることであると考えていた。この方法は、隣接していた製紙工場の原料が大量に流れ込んだ博物館の民俗資料について大きな成果を上げることができた。しかし、他の現場の民俗資料の応急処置を進めていくなかで、少し状況が違うということに気づいた。それは、民俗資料の表面を汚損しているものが海砂であり、乾燥している場合は、無理に水を使わなくても、刷毛などによる払い落としの作業で十分に除去できるということである。また、応急処置を進めていた時期が梅雨を迎えつつあり、水を使った洗浄は、乾燥過程でカビが発生することが懸念された。そこで、多くの民俗資料については、水は極力用いず、柔らかい刷毛やブラシで構成する洗浄キット(写真2)を用いて作業をおこなうこととした。もちろん、水洗作業をおこなう必要があると判断したものは、洗浄後の乾燥に十分に配慮しながら作業をおこなった。以上の作業では、洗浄キットで落とせるだけの砂を除去するという極めて明かな判断基準を作ることができたことから、約4000点

にも及び大量の民俗資料の一次洗浄を達成できた。

次に第2段階での作業は、塩分の除去を見据えた活動であり、2012年度以降の課題として、現在実施している。具体的には、救出した民俗資料の状態調査の実施からはじめ、津波に含まれた塩分が材質に及ぼす影響の検証をおこない、脱塩処理の実施を検討するというものである(写真3)。その結果、特に木部を主要構成素材とする資料は、塩分劣化を防ぐための脱塩処理が必要との結果が得られた。また、塩分を含んだ民俗資料は、塩分が湿気を呼び込み、カビを発生させ、一時保管場所全体の環境を汚損することも懸念されることから、なるべく早い時期に脱塩処理をおこなうことが望ましいと結論づけた。現在、被災地の博物館や大学機関と連携して、本格的な脱塩処理の実施に向けた体制作りをおこなうとともに、大量の民俗資料に対応するため、本格的な保存修復としての脱塩処理を実施するための予算申請を検討している。

被災した有形文化財が復興するまでの活動

以上、被災した民俗資料の救援活動について、救出・一時保管・応急処置を紹介した。また、応急処置としての第2段階目の作業としての脱塩処理について紹介した。しかし、これらの活動は、地域文化財としての民俗資料としての価値を取り戻すものではない。そのような価値を取り戻すための活動として、私は次の8つの活動があると考えている³⁾。

被災:災害が発生して被害を受けた状況で、何も対処されていない状態。

救出・一時保管:文化財を被災現場から移送し、安全な場所で一時的に保管する活動。

応急処置:ほこりや泥で汚れたり、壊れてしまった文化財がさらに悪い状態にならないための応急的に処置を施す作業。

整理・記録:救出した文化財の点数を確認するとともにリストを作成し、その全体像を把握する作業。

保存修復:本格的な修復が必要と判断された被災文化財に対して保存修復の専門家がおこなう作業。

恒久保管:復旧した所有者の保管場所に返却、もしくは、博物館などに預けて安全に保管するための活動。

研究・活用:これまでの過程でおこなわれてきた専門的な研究活動を取りまとめるとともに、被災文化財が本来持っていた情報を付与する活動。また、これまでの成果を社会に公開す

る活動。

防災:支援活動全体を通して得られた教訓を生かし、次の災害に備えるための活動。

このような8つの活動のうち、救援委員会としておこなった活動は、「救出・一時保管」、「応急処置」である。そして、現在、被災地と連携しながら、救出した文化財のリスト作成のための「整理・記録」、「保存修復」の一部の作業をおこなっている。今後は、文化財として本来の価値付けがおこなえる資料情報を付与するための「研究・活用」の活動を視野に入れなければならない。また被災地では、救出した文化財をあるべき場所に戻すための「恒久保管」に向けた活動も展開していかなければならない。

今後の活動について

現在、被災地の復興は確実に進んでいるものの、なかなか元の社会生活には戻っておらず、博物館施設の復興計画も

ままならない状況である。したがって、暫定的な収蔵庫としている一時保管場所の使用は長期化している。そこで、国立民族学博物館が所属する人間文化研究機構も、被災地支援となる研究活動を展開できる研究枠を設け、筆者自身は、「文化財の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究—大学共同利用機関の視点から」の研究代表者として活動をおこなっている。今後は本研究会を中心に、①一時保管場所における民俗資料の保管体制の構築、②災害時におけるミュージアムの連携体制の構築について取り組んでいく所存である。



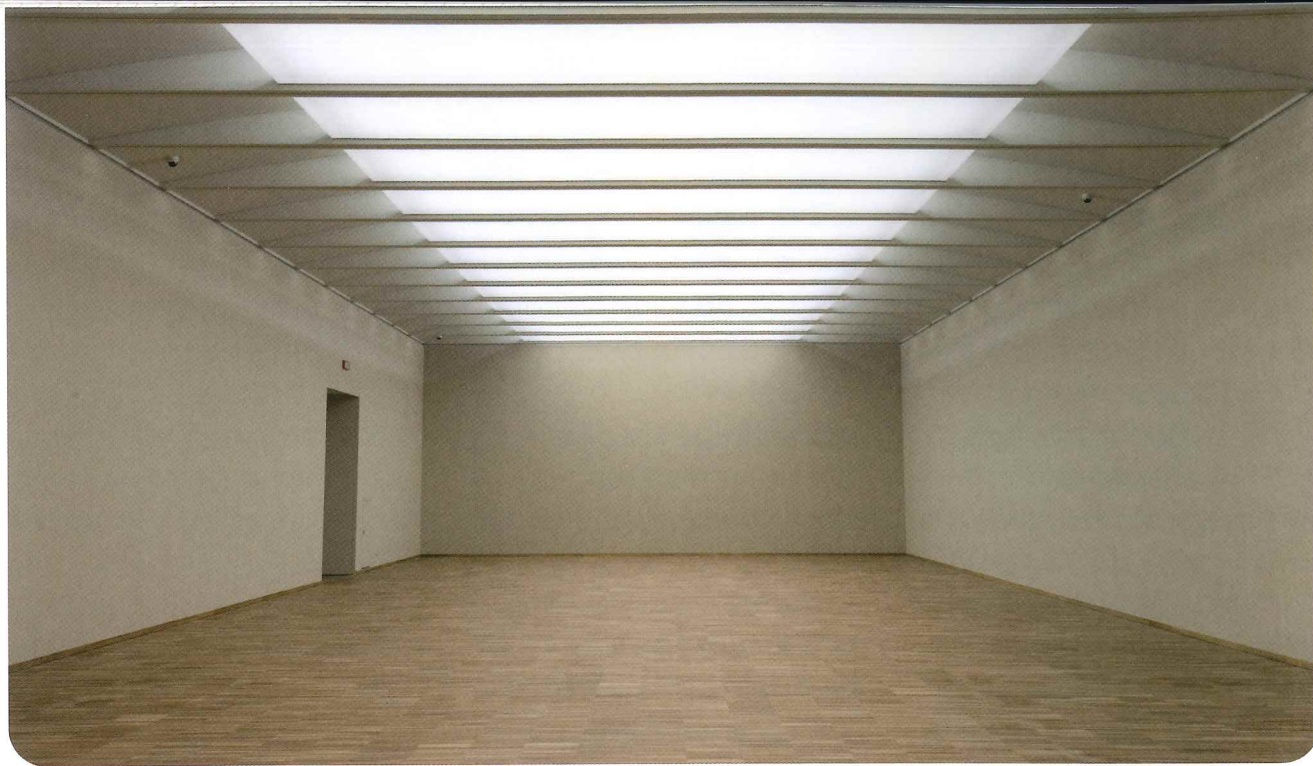
写真3/脱塩処理作業

国立民族学博物館

所在地 / 大阪府吹田市千里万博公園10-1
開館時間 / 10:00~17:00
休館日 / 毎週水曜日
(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年始年末(12月28日~1月4日)
URL / <http://www.minpaku.ac.jp/>

参考文献

- 1) 阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会事務局「阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会活動記録」1999年
2) 日高真吾(石井里佳、川本耕三、他3名)「民俗資料の劣化とその対処法に関する研究(1)—木部への塩分浸透実験と金属防錆処理法の検証実験—」『日本文化財科学会第27回大会』P310-311 2010年
3) 日高真吾「東日本大震災における被災文化財の救援の現場から—有形民俗文化財の支援を中心に」『民博通信』135 P2-7 2011



新展示室



文化施設

07 岐阜県美術館の IPM(総合的有害生物管理) 導入について

R e p o r t

岐阜県美術館

廣江 泰孝(岐阜県美術館 学芸員)



新展示室 工事風景

岐阜県美術館では、環境への配慮から、IPM(Integrated Pest Management: 総合的有害生物管理)を平成12年より導入し、人体に有害となる燻蒸剤に頼らない方法で作品の保存管理を行っています。防除方法としては、主に清掃業務・生物生息調査・温湿度管理・館内スタッフやボランティアスタッフ(岐阜県美術館サポーター)への研修を、年間を通じて実施しています。虫害および虫の発生を確認した場合は、被害状況、虫の同定、発生原因および場所や時期を確認して、必要があれば追跡調査を実施し、対象物を速やかに隔離した上で処置方法を検討していきます。主な殺虫法として、低酸素濃度処理を実施してきました。また真菌調査および空気環境調査については、環境の変化等、必要に際し実施しています。IPMの考え方を美術館活動に導入してから十数年が経ちましたが、本当の意味で、作品の保管展示環境のみならず、その都度変化していく美術館活動全体へ波及させたり、対応していける段階となるまでには、今日に至る時間が必要だったのかもしれないと、新たに保存担当として採用されたスタッフとともに、日々直面する新たな状況と向き合いながら思っています。ここに至った経緯を、記しておきます。

岐阜県美術館は、平成元年に、収蔵庫内で臭化メチル・酸化エチレン製剤(商品名:エキボン)によるガス燻蒸を実施しました。以後は、薬剤を多量に使用する点や残留ガス濃度についての問題から、施設のガス燻蒸は行っていません。新たに収蔵する作品等、処置が必要と判断した場合は、ガス燻蒸装置を備えた移動燻蒸車を用いて、その都度対処し

てきました。

平成10年10月発行の岐阜県美術館後援会会報「あゆ」第21号に、「美術館と環境問題(学芸員・青山訓子)」が掲載され、美術館における環境問題および人体に配慮した作品保存のあり方を模索するようになっていきました。

平成11年5月、所蔵品展示室内の1部屋を、防虫を目的とした処理を行う必要があり、エキボンの代替品として忌避処理剤であるピレスロイド(シフェトリン)炭酸製剤(商品名:ブンガノン)を、密閉空間にして使用しました。作品は撤去して展示施設を対象としたものでしたが、噴霧した薬剤が付着・残留する処置だったため、ガラスケース内や展示台等に薬剤が付着してしまい、完全に拭き取れない状況に陥ってしまいました。この出来事をきっかけに、美術館の機能および役割を損なわない、環境に配慮した人体にも作品にも安全な対処方法はないものかと真剣に考えるようになりました。十分な時間をかけた情報収集や技術的な領域にまで踏み込んだ調査研究に取り組みははじめました。生物生息調査を含め、当館としての総合的有害生物管理方法を館全体で検討するきっかけとなった出来事でした。

また同年7月、空気環境調査(DDVPによる館内汚染調査)を実施しています。平成7年から平成11年まで、収蔵庫および収蔵庫前室と所蔵品展示室の一部に、蒸散性防虫剤であるDDVP(ジクロルボス)蒸散製剤を成分とする市販品(プレート状)を設置していましたが、設置場所で作業をする館のスタッフから、体調不良の報告が多かったことや、来館者(鑑賞者)から設置に関する危険性を指摘されたこともあって、全て撤去し、残留濃

度の調査を目的として実施しました。調査結果を受けて、以後、館内での使用を中止することにしました。

岐阜県美術館のIPMに基づく管理方法は、できるところから実施していく方針をとってきました。まずは定期的な生物生息調査(飛翔虫および徘徊虫)からはじめました。また真菌調査(浮遊菌調査を含む)および空気環境調査(ギ酸・ホルマリン・酢酸・アンモニア・臭化メチル・DDVP)を実施しています。かなり大がかりな調査で、館内全域及び館外に定点観測位置を決めて調査するというものでした。まずは判断の基準となる年間を通じての基礎データを必要としていたからです。

同年、文化財加害生物の生息を確認した場合の隔離方法ならびにその後の対応について環境整備し、薬剤に頼らない殺虫方法として、窒素置換による低酸素濃度処理を、館内で実施しました。処理後、岐阜県公衆衛生検査センターにおける試供虫の甦生およびふ化の検査成績書により、効果が認められたことを確認しています。

以後、文化財加害生物の生息を確認した作品を隔離した場合、低酸素濃度処理で対応しています。処理には、対象作品が小さく、また数が少ない場合は、水分中立型脱酸素剤を用いています。対象作品が大きく、また数が多い場合は、当館設置の文化財低酸素濃度自動処理機械と専用テント(ガスバリアフィルム3層構造W1800×D2000×H2500mm)を使用した窒素置換による処置を基本としています。

現在では、新規収蔵作品を主とした受け入れ時の生物調査に重点を置いています。平成22年からは、館内スタッフ、ボランティアスタッフ(岐阜県美術館サポーター)全員による生物生息調査(虫バトロール)がはじまりました。虫害および虫の発生を確認した場合は、被害状況、虫の同定、発生原因および場所や期間を調査し、速やかに隔離した上で処置方法を検討していきます。また必要があれば追跡調査を行っています。

その時々状況に合わせて、フレキシブルに対応するよう心がけており、平成24年1月に竣工した増改築工事による美術館施設の大幅な機能変更にあわせて、当年度はIPMに基づく生物生息調査を、館内全域において定点観測を通年で実施しました。また今度予定している大規模な生物生息調査のためのサンプル調

査を実施しています。

調査の結果、文化財加害生物の生息を確認した施設の各箇所については、設置場所および期間に十分な注意を払いながら駆除用誘引剤を用いた初期対処を行い、後日、その効果を確認するなど、状況に合わせた対応策がとれるようになってきました。

また保管環境の変化等、必要に際し行う空気環境調査については、拡散型サンプレーを用いた簡易なパッシブインジケータ(有機酸用・アンモニア用)を経過観察用に用いています。こうしたパッシブ法による調査には、パッシブインジケータ測色計を用いる方法と、カラースケールによる方法がありますが、検査目的に合わせて使い分けています。曝露時間別の数値や、特定物質の換算値を算出することで、濃度変化を確認し、除去のた

めの対策を講ずるのに役立っています。

精密な分析を必要とする場合は、ガスクロマトグラフ質量分析法など、測定の対象となる物質の種類と検査目的に即したアクティブ法による調査を実施しています。異常が認められた場合は、その発生原因を特定し、物理的な除去を第一と考え対応しています。発生源が移動不可能な場合は、換気や吸着シートおよび吸着フィルター(除去フィルター)による、あらゆる低減措置を検討し、空気環境を整えています。

今年春には、増改築工事にともない当館用に設計し設置された特種なケミカルフィルター(アンモニアと有機酸の除去フィルター)の交換時期を迎えたため、取り換え作業に併せて、その前後にアクティブ法によるアンモニア(インドフェノール吸光度法)と酢酸(イオンクロマ

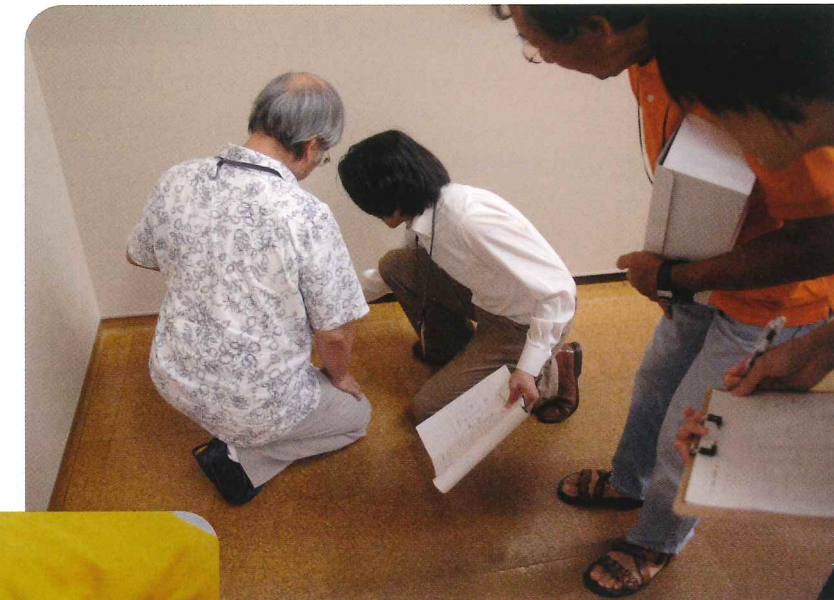
トグラフ法)の空気環境調査を実施しました(23℃換算)。

IPMを導入したことで、その考え方が空気環境のみならず、展示方法や収蔵方法等、保存管理全体へとゆっくりと浸透するかのようになくなりました。また収蔵品の保存管理のみならず、県内各施設、他機関ならびに個人からの相談を受け付けるなど、保存管理について地域における拠点施設としての役割を担うようにもなりました。所蔵作品を搬送、展示する移動美術館や、スクールミュージアム等、湿度変化の激しい施設での展示に対応した調湿型密閉額縁や保存額縁など、様々な展示条件に即した仕様計画をストックできるところまでできています。作品の保存のみならず、鑑賞者にとって、より

快適な展示空間となるよう、額縁の低反射アクリル(ガラス)への変更や、フィルター交換による色温度可変式照明(調光型)を採用するなど、展示方法の刷新計画を含む、総合的な保存管理の在り方を模索していく段階にきていると、日々実感しています。



増築棟外観(北門から)



サポーターによる虫バトロール風景1/徘徊虫用トラップを仕掛ける



サポーターによる虫バトロール風景2/何かみつけた

岐阜県美術館

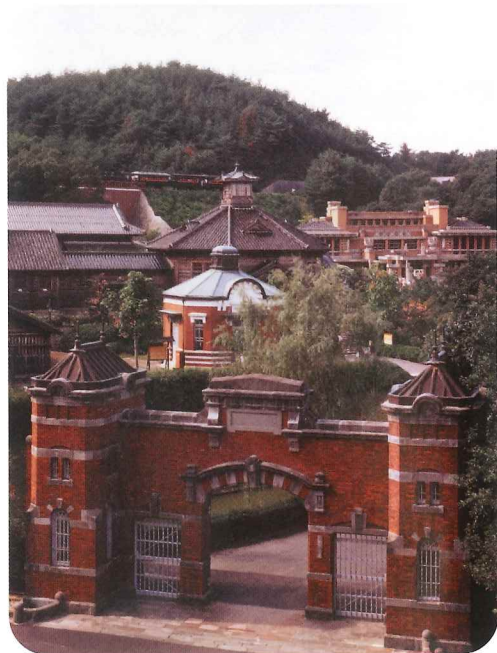
所在地 / 岐阜市宇佐4-1-22
 開館時間 / 10:00~18:00(展示室入場は17:30まで)、
 企画展開催時の第3金曜日(夜間開館日)は
 10:00~21:00(展示室入場は20:30まで)
 休館日 / 月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌平日)
 年末年始(12月27日~1月3日)
 観覧料 / ウェブサイトにてご確認ください
 URL / <http://www.kenbi.pref.gifu.lg.jp/>

—博物館明治村に関する概要についてお伺いします。

はじめに設立経緯のお話です。1960(昭和35)年、旧制四高(現在の金沢大学)の同窓生だった二人のキーマンにより、博物館明治村(以下、明治村)の壮大な構想が動き出しました。二人とは建築家の谷口吉郎(故人)氏と当時の名古屋鉄道副社長・土川元夫(故人)氏であり、戦後の急速な経済成長の陰で失われつつある明治時代の建築物のうち、歴史的にも文化芸術的にも価値があるものを末永く保ちたいとの意見で一致し、1965(昭和

40)年に博物館として開館したのが「明治村」です。

1960年代当時は、経済発展・新しい街づくりが最優先された時期でもあり、土地開発の妨げになるなどの理由で明治



明治村5丁目

明治期の貴重かつ豊富な資料と、IPMの日常管理



博物館明治村

話し手 中野 裕子 (博物館明治村 主任学芸員)

聞き手 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)

期の建物が姿を消していきました。ご当地で保存が難しい、つまり建築物の歴史的価値を認めて貰えないものは取り壊しが決定しますが、明治村ではそれらを譲り受けて移築されてきました。それぞれの建物には家具調度などを陳列して公開していますが、その建物に関連した資料も常設展示されています。

—明治村の特長について伺います。

名前の通り、明治に纏わるあらゆるものを収集・公開しています。特に、明治期は西洋からの生活や文化に深く影響を受けており、その中でも建物はランドマーク的な存在でした。現在、建物についてだけでも国の重要文化財に10件、愛知県の有形文化財に1件、指定されています。また建物をはじめ、版画や機械、家具などを数多くコレクションし展示し

ています。展示されている家具の一部には、実際に座ることができます。明治時代の生活や文化に触れられる明治村は、全国各地の方々に観光や修学旅行のルートとしても組み込んでいただき、年間40万人を超える方々にご来村頂いております。

ちなみに収蔵している資料は多岐にわたっていますが、職員総勢30名の内、学芸職は3名と学芸常勤補助員(アルバイト)5名程、建築職3名で、資料の管理に携わっています。

—明治村の学芸という仕事についてお尋ねします。

学芸業務としては、大まかに6つの業務を担っています。

1. 常設展示の管理

まずは、常設展示・建造物の維持管理

としてIPMチェックを行っています。明治村は自然が豊かな場所にあるので、たくさんの虫が生息し、樹木も生い茂っています。文化財害虫の他、来村者が不快に感じる害虫などが大量発生しないよう日常的に管理を行っています。ほとんどの建物に空調は設置されていないために、梅雨時や冬期には結露対策も施しています。過去には結露に気づかず、長い期間部屋を締め切ったままにしたために、床が抜けたりしたこともあります。以後、モニタリングし、その結果をマッピングすることによりやっと害虫被害の履歴管理ができるようになりました。展示建造物には貴重な歴史資料の展示もおこなっていますので、データロガーで湿度を管理しています。建物だけでも64棟あり、意外と大変です。とても全部の建物には配置できませんが(笑)。デ

ータ収集の効果としては、①データの見える化を図り、展示建造物や展示室の環境改善の予算要求がしやすくなりました。②虫の生育時期の把握がしやすくなりました。「もうそろそろ、チェックや換気の間隔をこまめにしなければ」など、早めの対処ができるようになりました。

2. 各資料の調査・研究

明治期の多くの資料について調査研究を行っています。特に、明治村には東宮御所(現 国宝迎賓館赤坂離宮)や明治宮殿などで使用された400点を超える家具をコレクションしており、他の博物館美術館にはない貴重な資料です。現在、目録化を進めています。それらの情報はまだ十分ではなく、新たな発見があった場合は季刊誌「明治村だより」で発信しています。

3. 教育普及の推進

教育普及の一環として、明治村でのワークショップや見学ガイドを行っています。



ワークショップ

4. 明治村だよりの発行

明治村だよりは年4回の発行を行い、イベント情報だけでなく、明治村で収蔵している資料・コレクションを紹介しています。

5. 明治村茶会の企画運営

明治村の広大な庭園で年に1度、大きなお茶会を開催しています。流派にとらわれることなく、歴史的建造物の活用の一環です。

6. レファレンスの対応

明治に関連した外部からの質問への



(常設展示) 旧東宮御所紅の間

対応を行っています。特に、マスコミ関係者の方から問い合わせが多く、例えば、クイズ番組や映画・ドラマにおける明治期の時代考査証に関することです。また、明治村では映画やドラマのロケ撮影にも活用されています。

—建物へ資料も展示されていますが、保存に関する取り組みについてお尋ねします。

展示資料は温湿度や自然光をコントロールできない中で展示されていますので、展示資料の状態の確認や、急激な温湿度変化がないかなどに注意を払うとともに、ガラスが多用されている建物には紫外線カットや防虫に効果があるといわれるフィルムを貼るなどの対応をしています。しかし一番大切なことは、日ごろの目視点検ですね。

収蔵に関しては、これまでは展示建造物の公開していない部屋を収蔵庫として使用していました。何度も申し上げるように、温湿度管理ができていない部屋です。加えて、資料は受入順に収蔵されていきましたので、文書の隣に農具が置いてあったり、宮廷家具の隣に解体材のレンガが置いてあったりという感じでした。現在、やっと資料の材質によって収蔵場所を変えたり、文書箱を使用するところまでできました。

今回、専用の収蔵庫を整備できたことで、貴重資料をより良い環境で保管することができるようになりました。また、他館との資料貸借もありますので、きちんとした収蔵庫が整備できたことは非常に喜んでおり、資料のコンディション

レポートに対処できる受け入れ体制の整備は心強くなりました。

—最後に、今後の活動について展望をお伺いします。

明治村は見学者が実際に触れて、体験することができる、ユニークなミュージアムです。例えば、洋館では椅子に座って、建造物の空間を味わい楽しんでいただくことの大切さも訴求できればと思います。それらを体感したことで、明治村に展示されている建造物や歴史資料と見学者の距離が縮まり身近に感じられる、そんな博物館を目指したいと思います。明治時代の生活や文化を後世に伝えるため保存に留意するとともに、「明治村」という文化資源を再認識していただけるよう訴求していきたいと思っています。

—本日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。



企画展示の様子

博物館明治村

所在地 愛知県犬山市内山1
 開村時間 9:30~17:00(11月~2月は変更あり、ウェブサイトをご確認ください)
 休 村 日 12月31日、
 12月~2月中の毎週月曜日(除く年始、祝日)
 観 覧 料 / 有料(ウェブサイトをご確認ください)
 U R L / <http://www.meijimura.com>



—はじめに、館の概要と特長を伺います。

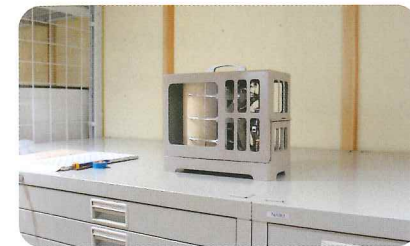
香美市立やなせたかし記念館・アンパンマンミュージアムは、アンパンマンの作者・やなせたかし氏のふるさとである高知県香北町に1996年7月に開館しました。当初の予想を上回る大勢の方々がアンパンマンの世界を楽しむために県内外から訪れたため、アンパンマン以外のやなせ氏の作品を展示し、漫画・イラスト・絵本・詩など幅広い芸術文化を発信していく場として、1998年8月に「詩とメルヘン絵本館」が新たに開館しました。そして、その他のイベントや地域の文化

活動の場として2001年7月に「別館」が開館。2011年10月には収蔵庫を増設し、現在は「アンパンマンミュージアム」、「詩とメルヘン絵本館」、「別館」、「収蔵庫」の4棟で構成されています。

豊かな自然に囲まれ、日常の喧騒から離れゆっくりとした時間を過ごしていただける大人も子どもも楽しめる美術館です。県内外より年間約20万人の方が訪れています。

アンパンマンミュージアムには、当館のためにやなせ氏が描き下ろしたタブロー画をはじめ、アンパンマンの絵本原

る書庫が1室、アンパンマン以外のやなせ氏の作品や、その他の作家による作品を保管する作品庫が1室あります。作品庫内はすべて空調を温度20℃湿度55%に設定し24時間稼働させており、温度と湿度は空調の温湿度計のほか、自記式温湿度計で計測しています。また、各作品庫の入口には粘着マットを置き、埃の侵入を防ぐようにしています。



3Fには、アンパンマン関係の玩具・グッズ類の保存庫が1室あります。

さて、収蔵庫の施設計画において配慮したことといえば、建物の壁面の装飾とエコロジーの2点が挙げられます。

建物壁面には表側に縦8.6m、横21mのアンパンマン、裏側には縦7.5m、横21mのばいきんまんのモザイクタイル画が施されています。アンパンマンは2.5センチ四方のモザイクタイル273,840枚。ばいきんまんはモザイクタイル235,200枚。やなせ氏が収蔵庫のために描き下ろした原画をもとに、タイルを用いて再現しました。とりわけ赤いタイルについては見本にない色味のものだったため、特別に焼きました。「収蔵庫というのは窓がほとんどなく、愛想のない建物なので、思案した結果、外壁をモザイクタイルのアンパンマン壁画でカバーすることにしました。観光スポットであると同時に周囲の景観にとけ込むようにデザインは派手に、色彩は淡くおさえました。僕はミュージアムの前の広場が子どもたちの楽しい笑い声や歌声であふれるようにといつも夢見ています」とのやなせ氏の想いを受け、壁画にすることとなりました。

また、もう一つの意向として、「環境に配慮したものであること」があり、屋上に太陽光発電を設置することとなりま

した。ただ、建設地が山に近く日照時間が少なかったため、大規模なものではなく、一般家庭用の太陽光発電を導入しています。ちなみに、収蔵庫内の天井照明は、ほぼ全て消費電力の少ないLEDにしています。

—実際に開館してみて気づいた点や課題などはありますか。

周辺に自然が多いため、虫の侵入および虫害、トラックヤードや通路の湿度が不安定になるなどの心配があります。1時保管庫というクッションがあるおかげで、まだ作品庫に虫やカビが発生したことはありませんが、現在、建設会社とも打ち合わせをして、よりよい解決方法を模索しているところです。

収蔵庫の環境だけでなく、作品保存についてもよりよい方法を模索中です。現在は作品庫において、同じシリーズの原画ごとにまとめて、箱に入れて保管しています。地震などが起こった際、原画への衝撃を和らげてくれるというメリットがあるため、原画を箱に入れて保管していますが、ダンボール箱から発生する酸によって原画がダメージを受けないかどうか心配です。中性紙保存箱に移して保管するという手段が最良かもしれません。また、当初の予定から変更して移動棚への作品の出し入れを片側のみから行うことにしましたので、出し入れする方向と反対側の支柱の袖孔に、さらしをねじって作ったひもを張ることで落下防止として使用しています。これは他館の方から教えてもらった工夫です。

そのほか、庫内の収蔵棚には間仕切りをつけた仕様のももありますが、設置



時にはどの棚にどの作品を収納するか決定しきれなかったため、実際に作品を入れてみて、サイズに合わせて間仕切りを外したりしました。さまざまな作品にも臨機応変に対応し、安定した保存環境で管理できるようにしていきたいと思っています。

—今後の展望を教えてください。

作品の保存に関しては、収蔵庫内の保存環境や保管方法についての課題を解決し、よりよい活用を考えていきたいです。湿気や虫害のリスクなどについても、文化財虫菌害防除作業主任者の資格を持つ学芸担当者もおりますので、今後はIPMの勉強などを通じて更に知識を深めることが解決の糸口になると思っています。今のところ書虫の発見やカビの発生などはありませんが、常にベストな環境・方法を考えていきたいと思っています。

これからも、やなせたかし氏の多彩な創作世界について更に多くの方へ知っていただくために、より積極的な情報発信を行っていきたくと考えています。

—本日はありがとうございました。

やなせたかし記念館
アンパンマンミュージアム

所在地 / 高知県香美市香北町美良布 1224-2
開館時間 / 9:30~17:00 (7月20日~8月30日は9:00~17:00)
休館日 / 毎週火曜日(火曜日が祝日の場合は、その翌日)
※但し、下記の期日は無休期間です。
3月25日~4月6日、4月29日~5月5日、
7月20日~8月31日、12月24日~1月7日
URL / <http://www.anpanman-museum.net/>

やなせたかし先生の 多彩な創作世界を伝える、 家族で楽しめる美術館

香美市立やなせたかし記念館

話し手 鈴木 康将 ((公財)やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団 学芸員)
新谷 智子 ((公財)やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団 学芸員)

聞き手 / 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)

画など、アンパンマンの世界を多彩に展示しているやなせたかしギャラリーや、「それいけ!アンパンマン」の過去のアニメ作品を上映しているアンパンマンシアター。アンパンマンたちが暮らす町をミニチュアで再現したアンパンマンワールドなどがあり、実際に触れたり探したりできるような仕掛けがあちらこちらにあります。館内に順路はありませんので、好きなように楽しんで観ていただくことができます。

「詩とメルヘン」とは、やなせ氏が編集長となって1973年から30年間発行していた詩とイラストレーションの雑誌のタイトルです。詩とメルヘン絵本館では、やなせ氏の描いた雑誌「詩とメルヘン」の表紙原画や挿絵をはじめ、詩や漫画など、アンパンマン以外の幅広いやなせ氏の創作世界を紹介しています。来館して

「これもやなせたかしさんの作品だったんですね。初めて知りました」と、その幅広い仕事に驚かれる方もいらっしゃいます。また、「詩とメルヘン」ゆかりの作家や国内外の絵本作家による原画展も開催しており、そういった企画展を楽しむにきて下さる方も大勢いらっしゃいます。



—新しく増設した収蔵庫について伺います。施設計画について配慮したことや考えたことはありますか。

もともと、アンパンマンミュージアム

の3Fに1室、詩とメルヘン絵本館地階に1室の収蔵庫があったのですが、予想を上回る収蔵量の増加で収蔵スペースが不足し、窮状を知ったやなせ氏が建築し寄贈してくれることとなりました。そして、2011年10月、2階建て延べ712平方メートルの新収蔵庫が完成しました。

庫内はまず、1Fにトラックヤードがあります。その奥に荷解き室と作品の調査などを行う1時保管庫があります。1時保管庫の奥には、アンパンマン関係の原画を保管している作品庫が1室あります。額装されている原画は箱に入れて移動棚に、額のないものは酸アルカリ吸着シートを入れたキャビネットに保存しています。

2Fには、アンパンマン関連書籍や雑誌「詩とメルヘン」のバックナンバーをはじめ、やなせ氏に関連する資料を保存す





廃棄されてしまうことがあり、当館への一部移管もありました。

現在、当館は個人の方から直接ご相談いただくこともありますし、教育委員会文化係を通じて情報提供がある場合もあります。

また、そういった古文書の受け入れと整理・保存のほか、常設展・年2回の企画展・さげもんめぐりの期間^{※2}の特別展示などの公開や、公開講座などの教育普及、目録と年報の年1回の発行などの役割も担っています。

—職員体制はいかがでしょうか。

柳川古文書館には生涯学習課の係の内、市史編さん係と古文書館とが同居しています。市史編さん係は平成5年より柳川市が独自で行っている市史編さん事業に携わっており、古文書館の学芸業務を兼務しています。当初柳川古文書館と市史編さん係は所管も異なりましたが、市史編さんと古文書館には業務に関連性があることから当初から職員は相互に兼務し、のちに教育委員会の所管となりました。現在柳川古文書館には館長、学芸員(副館長)、学芸嘱託、業務職員、事務職員が各1名、市史編さん係に学芸員2名、事務職員(嘱託)1名、学芸嘱託4名、計12名の職員がいます。

—古文書の受け入れについてお聞きします。

こちらから伺って史料の保管状況や概要などを確認し、必要であれば整理などを行って、当館への寄贈や寄託などをご提案する場合、「こんなものが出て

きた」と、持ち主から当館にご相談をいただいで受け入れる場合があります。前者については月に数回調査へ赴くこともあります。後者に関しては教育委員会など、当館以外の窓口にご相談されるケースもあります。

筑後地方は戦災や人口流出が比較的少なかったため、昔からの「家」が受け継がれてきたという特色があります。そのため古文書も多く残っており、状態も良好なものが多くありました。

それらの古文書の所在に関しては、福岡県の緊急古文書等調査の際に判明していたものもありますし、「あの家に古文書があるらしい」などと周囲の方から情報をいただくこともあります。また、市史編さん事業による別件の調査時に古文書も発見する場合があります。

さらには市史編さん係が主催する講演などにおいて「古文書があればご相談下さい」という呼びかけをすることがあるのですが、それを聞いたことがきっかけでご相談を下さる方もいらっしゃいます。その意味で、古文書館と市史編さん係は相互補完の関係を築けていると思います。

—受け入れた後の業務の流れについて教えてください。

受け入れた後の古文書には、まず基本

的に簡易的なクリーニングを施します。古文書を受け入れた場合は、仮置場にて自分たちで二酸化炭素による殺虫をします。そして古文書の内容を確認して目録を作成し、整理・保管、公開するという流れになります。目録作成においては古文書の名称、年月日、作成者、宛所、内容、備考、形態などの情報を整理します。その後、古文書を書庫へ移します。当館には書庫2室、特別書庫1室、収蔵庫の計4室があります。

保管の際、古文書や道具に直接ラベルを貼るのではなく、識別ナンバーを書いた中性紙の封筒や箱に入れて保存します。ここからの出し入れは基本的に学芸員しかできません。

—資料保存の取り組みについてお聞きします。

既出ですが、古文書の受け入れ時は簡易クリーニングもしくは二酸化炭素による殺虫を行っています。さらに、カビなどがとりわけ危険な状態のものについては、本館である九州歴史資料館が行っている燻蒸の時期にあわせて持ち込み、一緒に燻蒸もしてもらうこともあります。頻度は多くはありませんが、これまで1、2回行いました。

本館とはこういった燻蒸の他、人的交流や、所蔵品を借りてこちらで展示をす



文化施設
10
Interview

自分たちなりのIPMへ、
はじめの一步

柳川古文書館

話し手 江島 香 (柳川古文書館 学芸員・市史編さん担当)
白石 直樹 (柳川古文書館 学芸員・市史編さん担当)

聞き手 木本 拓郎 (金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美 (金剛株式会社 社長室)

—はじめに、柳川古文書館の概要をお伺いします。

柳川古文書館は昭和60年10月に、九州歴史資料館の分館の1つとして開館して28年になります。施設名の通り、古文書を収集・整理・保管し、公開していくための施設ですが、近年では併せて伝世された道具類や甲冑、刀剣等も収蔵しています。現在当館は県の指定管理者制度導入に伴い平成17年度から柳川市が指定

管理者となっており、県と市との予算で運営管理されています。

当館の収蔵の多くは、筑後地方、主に旧柳河藩主の立花家をはじめ、その家臣の各家で伝世されてきた文書が中心となっています。また、国重要文化財指定の古文書群は福岡県内に7つありますが、そのうちの3つ^{※1}は当館が収蔵しています。

史料収集は70~80年代に福岡県立図書館が実施主体となり、県内の古文書に

関する緊急調査(所在確認)が行われましたが、当館はその後の追跡調査・整理の拠点としての役割を有しています。当時、各家庭に伝世されてきた古文書や道具類を個人保管することに不安を感じる、家の建て替えを行う、ご子息の生活拠点が都市部にあるなどの理由で古文書が廃棄され、散逸してしまいがちでしたので、当館への寄託・寄贈をお願いする形になりました。また自治体で保存されていた古文書についても、制度改変などの際に

※1：柳川古文書館収蔵の国指定重要文化財…「大友家文書」「鷹尾神社大宮司家文書」「立花家文書」

※2：さげもんめぐりの期間…雛祭りの期間のこと。

柳川においては雛祭りに雛人形だけでなく「さげもん」と呼ばれる吊るし飾りを飾る風習があり、地域をあげたイベント「さげもんめぐり」が開催される。



るなどの交流があります。意味のある本館・分館体制を築けているのではと思います。

また、資料保存のために、月に2回の書庫の清掃にも取り組んでいます。その日出勤している職員全員で、棚の掃除や床のモップ・掃除機掛けを行います。1回の実施時間は2時間を目安にしています。あまり長い時間をかけると1回1回の片付けが大変な労力になり、継続できませんので…

—そういったIPM活動を行うようになったきっかけと、現在の活動についてさらに詳しく聞かせてください。

以前は年に1回全館燻蒸を外部委託で行っており、燻蒸終了後は、予算的に炭素吸着が難しかったため、窓を開けてガスを外に排出していました。この作業手法についてはいくつか疑問がありました。まずは住宅地に立地している施設として燻蒸薬剤の廃棄方法については予算

の問題から留保していたこと、次に、せっかく燻蒸をしても強制排気とともに窓や扉を開けている間に外気や粉塵が入ってくることでした。業者の方からはこの方法が当たり前といったお話も聞いていましたので、浮かんだ疑問をどう解決してよいか分からない状態が続いていました。さらにいえば、薬剤によって殺虫・殺卵はしていても殺菌はしていませんでしたし、その効果の判定も難しかったので、そこにも疑問は感じていました。

平成14年度の東京文化財研究所の研修でIPMについて知りましたが、最初は「IPMのような活動は人手が多い館でないといけない」との認識でした。その後、平成22年度の九州国立博物館で開催された「ミュージアムIPM支援者育成研修会(基礎編・技術編・応用編)」に参加してみた際に、講師であった本田光子さんがおっしゃった「建物はどんなに良く作っても、どこかに必ず欠点が出てくる」との言葉に、当館の欠点=危機も知ろうとせず放置している自分自身の認識に対

して、目から鱗が落ちる思いがしました。国立博物館でさえ欠点が出てくるものだから、国立博物館に比べれば小さな当館が人手や予算などが少ないのは当然です。そんな資源不足を理由にして「IPMなんてできない」と切り捨ててしまっていたのは、当館のリスクにしっかり向き合うことからの逃げであり、思考停止だったのだと気づき、意識が変わりました。

研修から帰った時期がちょうど全館燻蒸の実施計画の時期だったので、実施の是非に関して非常に悩みましたが、館内協議で「今年はまず現状調査をやってみて、状態が悪ければ燻蒸を従来通り行おう」という結論に至りました。時間的に追い詰められたことも、最初の一歩を踏み出すきっかけになったことは事実です。

その後、できることから取り組んでいこうと考え、先ほど話した職員全員での掃除や、トラップの設置と月1回の確認を開始しました。掃除については最初に

手順書を細かく作成したのですが、すべて実施しようとなると非常に時間がかかってしまったので、当館で無理なく継続できるようなものへの見直しも行いました。また、職員の勤務シフト上なかなか全員が集まる機会がなく、IPMの話全職員に話すことは難しかったため、「IPMニュース」を月に1度発行することで浸透を図りました。従来から収蔵庫内に毛髪式の温湿度計を配置し、除湿機にて庫内管理を行っていましたが、様々な活動の結果として、虫の死骸を発見した職員からの連絡は自然と集まって来るようになりました。皆で作業を行うことで、目的の共有もできたのではないかと思います。また、私の参加以降、他の職員も九州国立博物館の研修を受けています。

—IPM活動の今後の課題は、何かありますか。

効果の判定をどうするか、というところだと思います。害虫は目に見えますが、

菌などは目に見えませんので(笑)。

継続性をどうやって持たせるかというのも大きな課題ですね。それも、マニュアル通りに行うのではなく、改善の意識を常に持つておく必要があります。

継続性にも、「効果が見えるかどうか」は関わってくるのではと思います。やはり効果があると分かれば続けられるのではないのでしょうか。ダイエットに似ていますね(笑)。

それに、現時点では燻蒸も止めていますが、建物も建設から約30年経って老朽化が進んでいますので、急激に保存環境が悪化するリスクも考えられます。そういった緊急事態への対処に関する判断・見極めもできるようになっておく必要があります。これも、年に1度の燻蒸をしていた頃には気づけなかった点だと思います。やはり「燻蒸さえしてしまえば安心」だと思って、思考停止してしまいがちでしたので。IPM活動についてはまだはじめの一歩を踏み出したばかりですが、今後も試行錯誤しながら当館なり

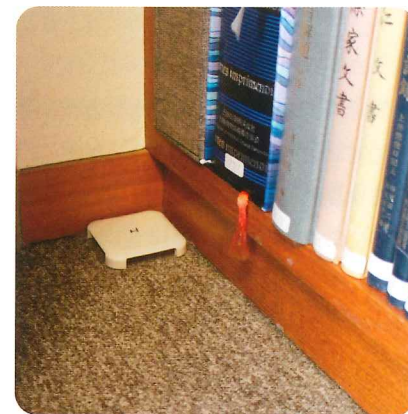
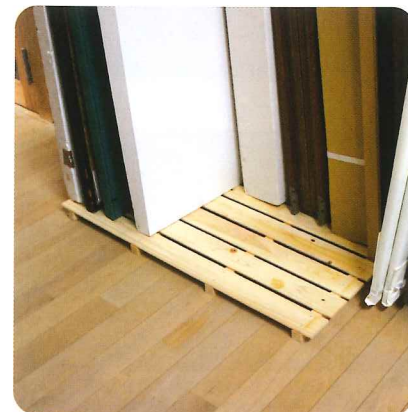
のIPM活動の形に落とし込んでいきたいと思っています。

—では最後に、館としての今後の展望を教えてください。

やはり資料収集から保存・公開という一連の流れを、IPM活動なども手段の一つとして適切に取り入れながら、より良くしていきたいと考えています。

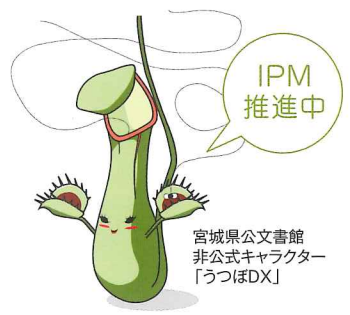
本来、古文書のようなものは、それが作られてきた場所で保管されるほうが良いものでもありますが、それが個人宅などで難しいという場合のために当館がありますので、そういった際に頼ってもらえるような場をいっそう整備していきたいですね。

—本日はありがとうございました。



柳川古文書館

所在地 / 福岡県柳川市隅町71-2
開館時間 / 9:30~16:30(入館は16:00まで)
休館日 / 毎週月曜日
(月曜日が休日の場合はその翌日、
年末年始(12月28日~1月4日))
入館料 / 無料



宮城県公文書館
非公式キャラクター
「うつぼDX」

の形で飾られています。その拓本とは「壺の碑」として有名な多賀城碑の拓本です。なぜ多賀城の拓本が八重の茶室にあるのでしょうか。新島襄が設立に関わった東華学校との関わりで当時の宮城県知事から送られたものではないか、という説があります。東華学校の「東華」は多賀城で没した万葉歌人、大伴家持の歌からきています。新島襄への贈物として多賀城碑の拓本を選ぶとは、何とも気が利いているのではないのでしょうか。裏千家の茶道を学んでいた八重も、この東北の古碑の拓本を見ながらお茶をたてていたのでしょうか。

ています。東華学校もその一つで、設立当初は校名を宮城英学校としました。この宮城英学校は仙台藩出身で第二代日本銀行総裁となる富田鉄之助などが中心となって活動していた東華義会という教育振興団体を母体として設立されました。この宮城英学校の初代校長に就任したのが新島襄です。もちろん新島襄の活動の中心は京都ですから、彼が毎日校長室の椅子に座っていたわけではありません。今風にいえば非常勤校長といったところでしょう。

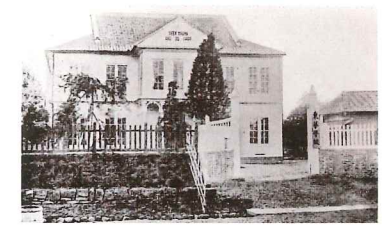
発っていた八重とは上野駅で待ち合わせて仙台に向かいました。途中、岩沼・名取の付近で大雨にあたり道路の冠水などの災難に遭いましたが、6月15日に夕方に仙台に到着します。17日には榴ヶ岡にある梅林旅館に宿を移し、その翌日に開校式に参列しています。

ここで一つの疑問が湧きます。なぜ新島襄が校長に就任したのか、です。この答えは新島襄の日記「出遊記」の中にあります。新島襄はアメリカ周遊中にリウマチを療養しようとサナトリウムに滞在していたことがありました。その時の日記には東北に英学校を設立したいとの思いが記されています。当初は仙台にするか、福島にするのか迷っていたようですが、富田鉄之助などとの手紙のやり取りを繰り返して、最終的には仙台での開学に踏み切ったようです。つまり新島襄は宮城英学校開学の主唱者としての校長の任に就いたのです。

宮城県公文書館には、この時の学校設立に関する申請書が残されています。自筆ではありませんが、校長の名として「新島襄」と明記されています。ただしこの部分は申請書には不要だったようで、上に紙を貼って消しています。今とは異なり、紙と筆の世界です。一度記されたものは簡単に消すことはできません。ですが、おかげで「新島襄」の名が残りました。

宮城県公文書館は平成25年3月に新島夫妻の足跡残る榴ヶ岡から、仙台市郊外の泉区紫山に移転しました。新島襄が「有名ナル榴ヶ岡」と讃えた地からは遠く離れてしまいましたが、木々に囲まれた自然豊かな場所です。また、理想的な環境を維持することができる空調設備やガス消火設備を備え、貴重な歴史資料・行政資料を保管することができるようになりました。宮城英学校設立に燃えた新島襄の記録はこの新しい公文書館で大事に保管されていきます。

明治20年6月、宮城英学校は校名を東華学校と改称し開校式が行われました。この時、新島襄は夫人の八重を従えて仙台にやってきました。一足先に京都を



東華学校（「仙台一中・一高の百二十年」より）

続いてはこの東華学校を頼りに、宮城と新島夫妻の足跡を探してみましょう。明治維新の後、仙台には多くの学校が設立されました。官立のものももとより、東北学院大学の前身である仙台神学校、メジャーリーグで大活躍のダルビッシュ有投手の出身校である東北高校の前身の東北中学など、多くの学校が開校され



収蔵庫



収蔵庫



閲覧室



職員の方

公文書館 11 Report

新島夫妻と宮城県と公文書と



宮城県公文書館
鈴木 琢郎 (宮城県公文書館 専門調査員)

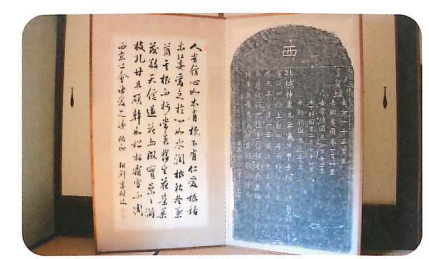


新島襄と八重夫人
【同志社大学提供】

明治時代、日本は文明開化や近代化を進めていました。「この時代に活躍した女性は誰でしょう。」と問われれば、以前は多くの人が「津田梅子」と答えました。しかし今はどうでしょうか。2013年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公、「新島八重」と答える人が多いのではないのでしょうか。ドラマをご覧の方はご存知のことと思いますが、八重は新島襄と結婚して新島姓を名乗ります。福島県の会津に生ま

れた彼女は、スペンサー銃を持ち戊辰戦争を戦い、戦後は夫の同志社の運営に助力し、夫の死後は日本赤十字社の社員として看護婦の職に就くなど、波乱万丈の人生を送りました。今回はこの夫婦にスポットを当てて、宮城県での足跡をたどってみたいと思います。

まずは宮城に旅立つ前に、京都の新島邸の中から「宮城」を探して見ましょう。新島邸には八重の茶室「寂庵」があります。その茶室の中に一つの拓本が屏風



多賀城碑文と李樹廷の書の屏風（新島旧邸所蔵）
【同志社大学同志社史資料センター提供】

宮城県公文書館
所在地 / 宮城県仙台市泉区紫山1-1-1
(宮城県図書館内2F)
TEL / 022-341-3231
FAX / 022-341-3233
URL / <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koubun/>
E-Mail / koubun@pref.miyagi.jp



一本日は、全国初の県と市町村の共同で設置された福岡共同公文書館を訪問し、色々運営についてお話を伺います。はじめに、館の概要と経緯についてお尋ねします。

(杉谷)福岡共同公文書館(以下、当館)は、福岡県と県内の地方自治体(政令市である北九州市と福岡市を除く)が共同で設置・運営する公文書館で、全国で初めての取り組みです。当館1階に総合案内をはじめ、閲覧室や展示室、休憩コーナー、作業室があり、2階には文書保存庫、マイクロフィルム保管庫、さらに一般利用が可能な会議室や研修室、3階に文書保存庫が設けられています。

当館では、文書保存庫が7つ設けられ、収納棚の総延長は26.4km、約88万冊以上の文書を所蔵する能力を有しています。

昭和61年から将来の公文書館設置を視野に、歴史的文書の選別を開始し、検討してきました。しかし、公文書館を単独建設することは、財政的に非常に厳しい状況でした。そこに平成の大合併があり、各市町村では、合併によって重要な文書が散逸してしまう可能性が懸念されたことなどから、平成18年、福岡県と市町村が協議・連携して、国内発の共同公文書館構想を打ち出しました。「共同」のメリットとしては、施設建設や運営

—文書保存庫の保存環境について伺います。

(堤)文書保存庫は、24時間の温湿度管理を行っています。ほとんどが紙資料であるため、温度について冬は22℃、夏は25℃とし、湿度は55%に設定されています。簿冊は、中性紙保存箱に収納され、棚は免震機能を有した集密棚を導入し、火災対策としてはガス消火設備を有しています。

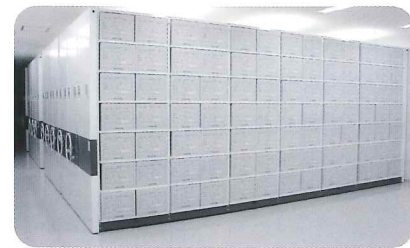
虫菌害対策としては、受入時の燻蒸処理だけではなく、文書保存庫へ入室の際は、出入口に粘着マットを敷き、靴の履き替えも行っていきます。

—まだ1年未満の運営ではありますが、課題について伺います。

(杉谷)来館者の方から「公文書館って何?」と言われることがあり、県民や近隣住民の方々の認知度は、非常に低いと感じています。各自治体においては、文書担当者しか認知がないかもしれません。私自身、広報も担当していますので、公文書館が何のための施設なのかを普及していくために、たくさんの課題があります。

それから当館の職員構成として、アーキビストと呼ばれるような正規の専門職員がいません。職員は、行政職であるため異動が伴います。開館時の職員マニュアルは、館全体で周知されていますが、実務を通じて分かった事務分担の追加・修正・見直しなど、細かな点を積み重ねながら、後任の職員へ業務をスムーズに引き継げるようなマニュアルのバージョンアップをしていかなければならないと思います。

(堤)資料文化財等の分野で進展しているIPM、薬剤に頼りすぎない保存活動を実務的にどう取入れていくのかも課題として挙げられます。移管されてくる文書は、自治体ごとに保存状態にバラツキがあり、年代によって紙質の経年劣化やカビの影響も見受けられます。文書保存庫への配架入庫時に燻蒸処理していますが、保存・管理の具体的なルール作りについて課題として挙げられるかもしれません。



—デジタル・アーカイブスについて、いかがでしょうか。

(杉谷)資料の利用普及を進めるため、デジタル・アーカイブスに取り組んでおり、マイクロフィルム化、デジタルデータ化については、推進していきたいと考えています。デジタル・アーカイブスについては、まだ取掛かったばかりであり、今後は活動を通じて、資料やノウハウを蓄積していきたいです。

—最後に展望について伺います。

(堤)当館の運営はまだ1年も経っておらず、始まったばかりです。受入・保存・管理等の態勢の確立に向けて、スキルアップを行っていきたく思います。具体的には、文書を見る目や技術、知識の蓄積、人材の育成・強化などが挙げられると思います。

(杉谷)課題として挙げた、広報担当として認知の向上を推し進めていきたいと思っています。公文書館という敷居がものすごく高いと思われがちですが、当館は一般利用も可能な展示室や会議室・研修



室も備わっています。企画展示においては、開館特別記念展として、「公文書にみる福岡140年のあゆみ～福岡県の誕生と市町村合併～」と題し、明治期以降の福岡県や市町村の誕生、合併などを紹介し、現在(平成25年9月時点)は、「公文書でひもとく福岡県の石炭産業～山本作兵衛作品とともに～」と題し、福岡県内の石炭産業を取り上げて、情報発信をしています。難しい公文書が多いなか、県民の方々に関心を持ってもらえる工夫、講演会や講座を開催し、多くの方々の接点づくりが重要だと考えています。開催告知については、色々創意工夫をしていきたいです。

当館では、まだまだ今後取り組むべき課題が山積みしていますが、1つずつ解決していきたいと思っています。

—本日は、貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

公文書館 全国初、県と市町村の共同公文書館

福岡共同公文書館



話し手 堤 エリ (福岡共同公文書館 文書班)
杉谷 紋羽 (福岡共同公文書館 総務企画班)

聞き手/木本 拓郎(金剛株式会社 業務本部)
原田 亜美(金剛株式会社 社長室)

の財政負担の軽減、適切な管理の実現、ワンストップサービスによる利便性の向上などが挙げられます。

平成24年11月に開館したばかりで、まだ1年も経っていませんが、着実に公文書の受入と利用を展開しています。

—それでは、運営についてお尋ねします。まずは、どのような組織体制になっていますか?

(杉谷)当館は、福岡県の出先機関として、また福岡県自治振興組合の内部組織として、館長の下に総務企画班と文書班が配置されています。非常勤嘱託職員等を含めると、総勢17名で運営しています。

—各自治体からの受入について伺います。(堤)公文書は評価選別基準に従って、各自治体で一次選別を行い、歴史公文書と

判断されたものが、当館に移管されてきます。移管された公文書は、職員が簿冊を一冊ずつ確認し、内容の入力等を行い、選別をしていきます。

そのデータをもとに、館長と文書班の職員全員で選別会議を行い、最終的に公文書館に保存される公文書を決定します。

整理された公文書は、燻蒸処理後、文書保存庫に配架されます。公文書は、中性紙の箱に入れて保存し、バーコード管理にて、保存庫と棚と簿冊のロケーションを管理しています。

—利用について伺います。

(杉谷)公文書の利用では、移管元自治体からの行政利用申込と、研究者や個人の方からの一般利用請求により手続を行う方法があります。その後、利用請求審査を経て、請求者へ決定通知書を発行し

ます。数ある公文書の中から利用目的に沿った内容を提供できるよう、利用者の方と話し、利用請求後は来館する際に決定通知書を御持参いただき、閲覧等することとなっています。基本的には、請求から15日以内に決定通知書を発行しています。

ちなみに、利用請求の場合、請求された公文書の内容を確認し、審査基準に従って審査を行いますが、個人情報等がある場合は、移管元自治体に意見照会を行い、当館で複写したものをマスキングしています。利用に関しては、自治体の借覧は可能ですが(30日以内)、一般の利用は閲覧と複写しかできません。

なお、文書保存庫へ返却する作業では、配架ミスを防止するために、2名体制で作業しています。



福岡共同公文書館

所在地/福岡県筑紫野市上古賀1-3-1
開館時間/午前9時～午後5時
(資料の利用請求・複写申込は午後4時30分まで)
休館日/月曜日、国民の祝日に関する法律に規定する休日
(その日が月曜日に当たるときは、その翌日)
年末年始(12月28日から1月4日まで)
特別整理期間として館長が別に定める期間
URL/<http://kobunsyokan.pref.fukuoka.lg.jp/>

設備メーカー、IPMとの出会い

はじめに筆者が所属する金剛株式会社(以下、金剛)は、博物館・美術館の収蔵庫設備及び展示設備、図書館家具及び書庫設備といった保存・保管設備全般の設計・製作・施工・メンテナンスを一貫した実施体制を有するメーカーです。

私ども金剛がまずIPM^{※1}を知り、IPMに携わるきっかけとなったのは、平成17(2005)年の九州国立博物館(以下、九博)の収蔵庫工事があげられます。九博設立準備室のご指導の下、収蔵庫設備の建築段階よりIPM活動を取り入れた製作・施工はこれまでにない考え方で進みました^{※2}。特に、設備の設計仕様を

はじめ、材料選定とトレーサビリティによる品質管理、虫・カビの餌となるものを持ち込まない工事現場の衛生管理、工事中の清掃作業等においてもIPM的活動の意識づけが行われ、施工を通じた文化財保護のための知識や配慮の重要性を本工事に携わった社員関係者は学ぶことができました。

さて、筆者は主に営業支援・販売促進・製品企画等の業務を担当しており、残念ながら九博工事に携っていません。納入後、販売促進用の写真撮影での訪問が初めてでした。表敬訪問へ帯同した時、副館長・担当課長より「収蔵庫は作るだけでは終わらない。IPM的収蔵庫のメン

テナンスについては、収蔵庫メーカーの役割も重要になってきた。」とのご意見を頂き、企画担当としてビジネスプランの立案に着手しました。

机上の論理とよく言われますが、IPMという言葉だけでは正直分かりづらい所があり、まずは九博におけるIPM活動の見学をはじめ、IPM研修会^{※3}やIPMシンポジウム^{※4}といった知識向上のための「学ぶ機会」に積極的に参加していききました。当初はIPMに関するテクニク論を求めているのですが、関係の方々とお話を重ねるうちに、大切なものを伝承するための「理念」を学ぶことに至りました。

13 文化財IPMと設備メーカーの関係性

～文化財IPMコーディネータとしての期待～

Report

木本 拓郎(金剛株式会社 業務本部)

文化財IPMの理念

文化財IPMの経緯や内容については、多くの有識の先生方にて報告があるので筆者からの詳細は割愛します。文化財IPMに関して筆者の認識としては、「従来の薬剤燻蒸の定期実施の保存管理」から、「IPM活動といった人の目と計測データによる日常管理の保存管理」へ、管理手法やその考え方がパラダイムシフトしたと考えています。

具体的には、パラダイムシフトの1つ目として、これまでは担当学芸員と専門技術者によって文化財保護のための知識や配慮が行われてきたと思われすが、IPM活動の場合は、担当学芸員だけではなく総務職員や清掃員、警備員、市民ボランティア、PCO^{※5}会社、物搬会社、さらには私どものようなメーカーまでが携わり、多くの方々が協力して文化財保

護の一端を担うことになるのです。文化財保護のための知識や配慮の「共有」と力を合わせて事に当たる「協同」こそ、文化財IPMの理念だと考えています。文化財IPMが単に掃除だとか、温湿度計による情報収集の単なるツールだけではなく、協同してある1つの目標に向かって進む、組織を変革するようなパワーを持っていると感じています^{※6}。実際、九博のIPM支援者研修報告会では、参加者の生き活きた発表内容と意気込みのある顔つきを多く見てきましたので、確信に近いものと感じています。

パラダイムシフトのもう1つが、設備(ハード)ありき論や業者依存論からの脱却であり、日常活動(ソフト)を含めたIPM的起点の協同ソリューションです。私どもは、メーカーとして設備による最適な保存環境管理をサポートしてきましたが、

限界があることも事実です。

例1) 停電や節電に伴う空調設備の停止
(実際はランニングコストの低減、運営予算の圧縮)

例2) 施設建屋や設備の老朽化
(改修費用が多額で予算獲得が困難)

例3) 収蔵庫や書庫の狭隘化で空調の排気口が塞がっていた
(空気循環の停滞が発生)

上記の要因で温度・湿度の変化が生じたことによる生物被害の話もよく聞くところ。また既存施設の建材や梱包資材による影響も文化財保存修復学会等でも報告されています。これからはエンドユーザー様と業者とが協同でこれらの要因を把握することで、施設全体の危機管理の掌握にも繋がっていくと考えています。

上記のパラダイムシフトは正直、全国的に広がっているかは判断が難しい所ではありますが、筆者が接するエンドユーザー様には着実に広がっていると感じています。

維持管理・IPMメンテナンスの必然性

80~90年代はいわば博物館・美術館のベビーブームでもあったため、現在、施設の老朽化は言うまでもなく、それと同様に「保存環境」「収納能力」のことで頭を抱えている館も多くある^{※7}とお聞きます。

一方で最近、老朽化したインフラや公共施設で発生した事故(例えばトンネル天井崩落事故)は、記憶に新しいところ。これらの多くの課題は、維持管理が後手に回されたり、点検を軽視したことによる結果だと思われます。

モノづくりの現場では、特に工場設備の定期点検についても人手を割いて実施され、点検に携わる人材の育成が行われています。点検で異常が見つければ、早めに対処する「予防保全」に取り組むことが大事です。状況が悪化してから直す「事後保全」に比べて費用が抑えられ、設備の寿命を延ばすことができます。

上記の背景を踏まえながら、近年、新築や改修にて素晴らしい保存設備や展示設備を大規模な予算を執行して作り上げられた施設は、それを適切に維持管理していく必要があると考えます。メーカーとしてハードとソフトを融合した提案で、総合的なソリューションをご提示できるように経験と工夫と積み上げて参りたいと考えます。

メーカーの立場でのIPMコーディネータ

金剛では設備提案(ハード)だけではなく、資料保存活動(ソフト)まで多岐に亘り、お客様からの相談対応が増えていきます。IPM活動も含めた総合的サポートによるお客様ソリューションの実践で、現在、納入後のメンテナンスとして、エンドユーザー様との協同でIPMメンテナンスのサポートを行っています。

また、モノづくりにも積極的に反映させていくことで、使い勝手のいい、メンテナンス性のいい製品の開発や改善改良活動へ取り組んでいます。

例1) 収納棚の場合、これまで収納量を重視した設計仕様でしたが、掃除し易いように足高仕様を社内標準としました。これは古くから棚の最下段には何も置かないという先人の知恵にも通じるころがあります。



例2) 収蔵庫内装工事は建築工事のカテゴリーに入ります。内装工事は段階的に清浄度を高めるように清掃を計画していきます。最終引渡し前には専用クリーナーと専用クロスにて、カビの温床となる収蔵庫内の塵埃の除去に努めています。

例3) 収蔵庫に什器をレイアウト提案する場合も、空気の停滞する空間や埃溜まりがないように設計考慮しています。しかしながら慢性的な収納空間不足を抱える施設では収納量(力)を重視されがちであり、安全の基準をどのように設け、お客様とのコンセンサスを図ることにしましてはこれからの課題と思っています。

IPMの視点からメーカーとしての責任はどのようなものなのか、文化財IPMコーディネータをどう活用していくのかと現在も試行錯誤しています。まだまだ、整理は未成熟な状況ではありますが、今後、エンドユーザー様をはじめ、PCO会社、

物搬会社との連携を行い、メーカーとしての情報収集と経験を蓄積していくことが課題です。

結び

筆者はIPMを学び始めて、「気づき」と「意識の変化」を感じています。

気づきというのは、IPM研修会の実習の中で塵埃の話が出てきますが、結構、部屋にも埃溜りがあり、毎週末それを掃除機で吸い取ると、その塵埃の多さにびっくりします。掃除を重ねるうちに埃溜りの場所がある程度、特定できるようになりました。大抵は隅にあるのですが、机のちょっとした溝の中とか、普段は全然気づかない、意識もしなかった所にも気づきが生まれたことは大きな収穫です。これは施設でも同様だと思います。

意識の変化については、他の人に任せずに自分自身で動いて、やってみることで、筆者自身の意識の変化に繋がりました。文化財IPMという言葉だけでは難しく、自分自身がやってみることで、色々な面で学ぶことができました。

筆者は博物館や美術館、図書館に勤めているわけではありませんが、現在の業務や私生活を通じて、文化財IPMに繋がる考え方を経験していると思います。今後は、さらに全国の多くの施設を通じて経験を積み、適切な提案を発信できる「収蔵庫メーカーのIPMコーディネータ」として、文化施設におけるIPM活動をサポートして参りたいと考えます。

さらにそれらの経験や工夫を社内外へ発信していき、より綿密なコミュニケーションを図りながら、文化財IPMの理念をはじめ、よりよい保存環境への貢献、さらに私どもの企業理念である「安心と先進で、社会文化に貢献する」を探求していきたいと考えています。

本文は、文化財の虫歯害65号(2013年6月、(公財)文化財虫歯害研究所発行)に寄稿した内容を一部修正しています。

※1: Integrated Pest Managementの略称 総合的有害生物管理

※2: PASSION Vol.30 特集・九州国立博物館 金剛発行

※3: ミュージアムIPM支援者研修(基礎編・技術編・応用編)

※4: 公開シンポジウム「市民と共に ミュージアムIPM」 於:九州国立博物館

※5: Pest Control Operatorの略称 有害生物防除・殺菌技術者

※6: PASSION Vol.34 熊本市現代美術館・全館一丸でのIPMへの取組み 金剛発行

※7: PASSION Vol.32 愛知県美術館・開館後18年を迎えたある美術館 金剛発行